

ホアン・マシア

J. M a s i a

信仰の門

洗礼志願者との会話の断片

入門ノートより

カトリック東京国際センター

CTIC Tokyo Catholic International Center

2015

はじめに

このノートは洗礼志願者との会話の記録です。

信仰入門に関するこの断片は、いわゆる「入門講座」でもなければ、キリスト教の教えを網羅するようなマニュアルでもなく、「入門ノート」よりの「会話の断片」にすぎません。

受洗者がその会話を思い出すため、または、入門を求めている他の方々の手引きになるためにお役に立てばと願ってまとめました。

J. マシア

はじめに、イエスとともに人生の道を歩み、「同行二人」

空海の教えになじみのある方は「同行二人」という言葉をよくお聞きになっているかと思います。どこの道を歩いていても、その巡礼者とともに弘法大師が傍にいる信仰に支えられている人々は旅を続けるのです。私はこの言葉を最初に伺ったときからすきになりました。私はこの言葉を聴くとヨハネ福音書で伝えられているイエスの言葉を思い出さないでいられません。「私は一人ではない。天の父なる神は私とともにいつもおられるのだ」とイエス仰せられました（ヨハネ7, 17）。

実はこのノートを書いている唯一のテーマは先の小見出しにあるとおり「イエスと共に人生の道を歩む」ということです。

そして、副題で歌っているとおりこの原稿は短なるノートにすぎないのです。筆者は受洗者との集いでの会話とノートより生まれたものです。それで、読書するためというよりも、練習のノートとして使っていただき、各読者が黙想したり、祈ったりしたときの参考程度になれば筆者は幸いです。

なお、一人ひとりが自分なりのノートに置き換えてくださるから本書がいらなくなったと言われればなお幸いです。とにかく、著者も使用者もこのノートをきっかけにイエスと共に人生の道を歩むことができるように筆者が願っているだけです。

焼き鳥屋で神様の話

この間のこと、私はある国際学会に参加して、何時間も難しい話を聞かされた後、夕方疲れてぐったりしながら、焼き鳥屋に立ち寄りしました。私は冷や奴にあじのたたきを注文しました。私のカウンターの右隣はトラックの運転手、左は学生で、店のおかみさんが話のきっかけを作り、いつのまにか妙な外人をもり立てる雰囲気ができあがっていたのです。おかみさんがおごると言っ、私にとろろを食べないかと勧めました。「せっかくですが、私はとろろと納豆だけは食べられないのです」と断りました。

しかし、がっかりさせたくない、お酒のほうを、もう一杯、もう一杯と、ありがたくいただきました。だんだん良い気持ちになってきましたが、そのうちふと、午前中に聞いた難しい話が頭に浮かんで来て、どうも国際学会の格調高い雰囲気よりも焼き鳥屋のほうが国際的ではないかなと感じてきたのです。そして、ますます調子にのって、レバーにモツ焼き、私の好物のピーマンとナスをつまみに、多いに飲み続けました。

隣の学生が突然、「先生、本当に神様はいると思いますか。いったい、どこにいらっしゃるのでしょうか」と言いました。座がしらけると思ったのか、店のおかみさんが「ここにいるでしょう」と言いながら、「神様に乾杯しましょう」と、おしゃくしてくれました。酔いが早くまわってきた運ちゃんの方が、「乾杯だけじゃ・・・賛美歌ですよ」と口をはさみしました。私の方も「さあ、天国音頭で行きましょう」と、手拍子を打って演歌調で歌い出し、次から次へと歌い続けましたが、だんだん眠くなってきて、目の前にあるものがかすんできたような気がし、私は、こぼれた酒に指をぬらしてカウンターの上に「天」という字を書き、それに続けて何かを書いた記憶がありますが、それから後のことはあまりはっきり覚えていません。

翌朝は、頭が痛くて遅くまで寝ていました。人間というものは不思議なもので、お酒に酔うこともあれば、音楽に酔うこともあります。人間とは天と地の狭間に生きているのではないかなどと思いましたが、しかし、考えてみれば、あの店のおかみさんが冗談のつもりで言った「神様って、ここにいるでしょう」という一言には、本人の意図しなかった大切な意味があるのではないのでしょうか。イエスによると、「天

の国」とは、「パンと葡萄酒」、「空の鳥」、「海の魚」、「麦畑」、
「披露宴」、「大掃除」、「家計簿」などのなかにもあるのですから・・・

イエスからいのちの福音を学ぶ

さて、これからキリスト教の信仰への案内になる手引きを書きたいと思いますが、できるだけわかりやすく述べ、ごく中核となるところだけに留まるつもりです。

他の宗教にも見られる現象ですが、キリスト教も例外ではなく、やはり時代と共に発展するにつれて付随的なものがつけ加えられてきます。そして、必然的に理屈も儀式も規律も、いつのまにか、増えてしまい、創立のころの簡単な信仰の持ち方が複雑になってしまいます。

そこで、余計な付属物を取り払い、初心あるいは本心に立ち帰る必要が常にあります。

私はここでそうした所に立ち帰る気持ちでペンを取っているのです。

イエスが伝えた神様に対する信仰は一言で言えば「真実の命」です。

「真実のいのち」という言葉ですが、これはイエスの弟子ヨハネの言葉です（新約聖書、ヨハネの第一の手紙、1, 1-5）。このヨハネの手紙の冒頭にキリスト教の要約が見事に簡潔な形で表されています。後でそれをお話ししますが、今、

この講座では「イエスとともに」歩みながら「真実のいのち」を求め、「イエスの福音を学ぶ」ことによってそれを求めたいということを記しておきます。

次に、この二つの言葉（「福音」と「真実野命」）について簡単な説明していきましょう。

神とともに生きる

ヨハネ福音書では次のイエスの言葉が伝えられている。「私は孤独ではない。〈天の父〉、〈父なる神〉は私とともにいつもおられるのだ」と（ヨハネ7, 17）。キリスト教の信徒は、イエスと同じように、この言葉が言えるようにしたいです。神様とともに人生の道を歩むということです。

イエスからいのちの福音を学ぶ

信徒の団体は発展するにつれてその信仰の持ち方には進歩も退歩もあるので、常に回心し、刷新する必要がある。

時代と共に発展するにつれて付随的なものをつけ加えられ、理屈も儀式も規律も、いつのまにか、増えてしまい、創立のころの信仰の持ち方（本心）が歪められたり、複雑になったりするのです。常に本心に立ち帰る必要があります。余計な付属物を取り払い、初心あるいは本心に立ち帰る必要が常にあります。植物を育てるときのごとくに例えましょう。水をやらなければなりません。そして定理もしなければなりません。信仰生活または信徒野団体野共同生活野成長野ために、「水」と『定理』が必要です。水は祈りです。定理は「共に考え、見直しすることです。カトリック教会は 1962・65 年におこなわれた『公会議』は〈本心に立ち帰り、現代と対話〉するという課題を抱えて開かれたが、各信徒と教会全体に対して「水をやる」ことと「枝葉を切る」ことに専念したのです。言い換えれば、信仰者の心を〈信仰と祈りの水〉で、そして教団や教会の組織を〈見直しと定理〉で教会の大きな刷新がおこなわれ、余計な付属物を取り払われ、初心に立ち返るように教会は努めて来ました。

福音

福音とはイエスが伝えた信仰を指す言葉です。それは福音書に書き記されています。聖書の中で新約聖書の所を開きますと、四つの福音書すなわちマタイ文書、マルコ文書、ルカ文書、ヨハネ文書がありますが、それは最初のキリスト者たちの間に口頭で伝えられていたイエスの生涯と教えに関する伝承を、福音記者が信仰者の共同体を代弁して書き記したものです。

「イエスの福音」とはイエスの good news すなわち「良い知らせ」、「喜ばしい知らせ」という意味です。いきなりこう言われると恐らく皆さんはこう聞きたくなるでしょう。いったいどんなグッドニュースだったのですかまたは「どうしてそんなに喜ばしいですか」。この質問に答えてこれからお話しするつもりですが、結論を要約して一言で言ってしまうと、「いのちの源である方から人間は子供として愛されているので、人間には希望と生き甲斐が与えられており、兄弟姉妹の世界を作っていくように励まされている」ということに尽きると言えます。

ですが、この教えは後でゆっくり取り上げることにして、福音という言葉についてもう一つの説明をつけ加えておきましょう。

「イエスの福音」とは三つの意味で受けとめられます。

- a. イエスが伝えた福音。つまり、イエスが伝えた信仰の教え
- b. イエスについての福音。つまり、イエスの生涯と教えを書き記した福音書
- c. イエス自身のこと。イエス自身が福音すなわち「朗報」であること、イエス自身の存在が人間にとって「良い知らせ」であり、「希望と生き甲斐をもたらすものである」ということです。

では「福音」についての説明をこの程度だけにして、つづいて続いて「真実のいのち」についてヨハネの手紙を手がかりに述べておきましょう。

真実のいのち

次のように書いております。

「はじめからあったもの、私たちが聞いたもの、私たちの手で触ったもの、私たちの目を見たもの、すなわち、命いのちのことばについて・・・そのいのちが現れた。そして、父のもとにあったが私たちに現れたその永遠のいのちを私たちは見て、あなたがたに証しし、告げるものである・・・私たちが見たもの、聞いたものをあなたがたにも告げ知らせる。それはあなたがたも私たちとの交わりに与るようになるためである。私たちの交わりとは父とその御子イエス・キリストとの交わりである。そして私たちがこれらのことを書くのは、私たちの喜びが満ち溢れるようになるためである。私たちは彼から聞いており、あなたがたに告げ知らせるのは、神は光であって、彼の中にはいかなる闇も存在しないということである・・・（1ヨハネ1， 1－4）

一番短い入門書

ここに載せた数行は「キリスト教入門」という題をもった多くの書物よりも、適切に、しかも完結に、イエス・キリストが教えた信仰の真髄を明らかにしてくれるのです。詳しい釈義は後回しにして次の要点だけに留意しておきましょう。

- a. この手紙はイエスに接した人の思い出から語られています
- b. 教えの中心は真のいのちで、永遠のいのちです。「いのちの源」のことは「父」と言われています。
- c. その奥義はイエスにおいて現れました。イエスはその表現であり、「いのちのことば」と呼ばれています。イエスは永遠のいのちを語っただけではなく、イエス自身がいのちそのものです。イエスは「父のもとにあった御子」と言われています。
- d. ニ) この手紙の差出人は複数の形で（私たち）話しています。宛先人も複数です（あなたがた）。
- e. ホ) 交わり（ギリシア語でコイノニア）という語彙も大事です。永遠のいのちの源なる「天の父から」、永遠のいのちの現れである御子を通して、私たちに永遠のいのちが与えられ、私たちを一つに結びます。それは同じ手紙の別なところで「息吹」とか「分け与えてくださる霊」とも呼ばれています（同上 3, 24）。
- f. キリスト教のこの信仰を短く表すのは十字架のしるしを示しながらキリスト者たちの唱える「父と子と聖霊のみ名によって、アーメン」という祈りの言葉です。

ナザレのイエスはキリストと呼ばれます

仏教が昔から盛んだった文化圏の人は「お釈迦様」、「釈迦牟尼」、「ブツダ」、「釈尊」などのことばを聞くのに慣れていますが、欧米人に説明するときシッダルタ・ゴータマという釈迦の部族の牟尼すなわち知者や聖者は悟りを開いてブツダとなったというところからはじめなければなりません。

簡単に、似ていることだと言ってしまえば仏教者の側からもキリスト者の側からも語弊反論があるかもしれませんが、釈迦の部族で生まれたゴータマがブツダ即ち悟りを開いた者と呼ばれるように、ナザレ生まれのイエスはキリストと呼ばれていると言えば一応の早わかりの説明になるでしょう。

キリストとは、神から「遣わされた」者、「選ばれた」者、「油を注がれた」者、またはメシアすなわち救い主の意味です。

そして、イエスはキリストである。すなわち私たちに救い（希望）をもたらす方だと信じている人にとってその名称は「主イエス・キリスト」です。言い換えれば、イエス（真の人）は主（真の神と同一のもの）であり、私たちに救い（希望、生き甲斐、ゆるし、永遠のいのちなど）をもたらすキリスト（使わされた遣わされた者）だということです。

キリスト教の出発点

先ほど述べた「イエスはキリストである」という信仰からキリスト教は始まりました。イエスが「キリスト」すなわち「わたしたちに希望をもたらす方」であると信じている人々はイエスのことをイエス・キリストと呼ぶようになりました。

「キリスト」とは先ほど言ったようにヘブライ語の「メシア」（油を注がれた者、選ばれた者、遣わされた者、救い主）のギリシア語訳です。

イエスは紀元前7～6年に生まれ、紀元30年に十字架上で死刑されました。27年頃、ガリラヤ地方を巡り歩いて「やっと神さまが支配する 때가近づいた」、「いのちの王国が実現される 때가きた」ということを告げ知らせ、人々に希望を与えたり、病人などを癒したりしました。

イエスが説いた「神の支配の実現」や「いのちの王国の実現」（言い換えれば「神様がのぞまれる望まれる世の中」、「真のしあわせに生きる兄弟姉妹の世の中」という福音（good news, Gospel, 良い訪れ、良い告げ知らせ）は、前述したように、父なる神がいのちの源であり、一人ひとり人間を造り、一人ひとりのいのちを大切にし、皆が兄弟姉妹として生きるように招き、真の幸せを人間に約束してくださるということです。

この教えは群衆に希望を与えたのですが、当時の既成宗教の指導者たちからイエスは危ぶまれたのです。イエスは捕らえられ、ユダヤ教の立法と裁判の議会である最高法院によって断罪され、当時パレスティナを支配していたローマ軍に引き渡されて、十字架刑によって処刑されるようになりました。

しかし、イエスの十字架の死によって失望し離散した弟子たちが、イエスは復活し今なお生きているという体験に基づいてイエスが引き起こした運動を続けるようになり、福音を告げ始めました。弟子たちの団体はエルサレムから出発して、ユダヤ教との衝突が生じたのですが、そのうちにユダヤ教とは別な「新しい信仰者の共同体」を形成するようになりました。そして、全世界に向けてイエスの福音を告げ知らせる運動を広めていきました。

このようにキリスト教ははじまった始まったわけです。

聖書という「家族アルバム」

先ほど言ったように、イエスの生涯と教えは、最初は口伝で伝えられ、後に「福音書」に書かれましたが、それはキリスト教を信じている者にとって聖書の中心です。福音書の中にイエスが弟子たちに教えた「主の祈り」がありますが、私はこの手引き書の枠として、これからその祈りを用いたいと思います。そして、教えの内容を展開するために福音書やその他の聖書の所を一緒に読みたいと思います。

聖書について百瀬文晃神父の概説に従って次のようにまとめることができます。

キリスト教の諸教会が教派の違いを越えて共通に規範としている教典。もともとイスラエルの民族と、そこから生まれたキリストの教会が自分たちの信仰を伝えるために書き記した書物。何百年もの長い歴史の中で多くの著者が、さまざまな形で書き記した多くの文書を、後の人々が収録したもの。

聖書には「旧約聖書」と「新約聖書」とがある。「旧約」と「新約」の「約」とは、神と民との間の「契約」という意味だが、旧約聖書はユダヤ教とキリスト教の共通の教典であり、原文はヘブライ語で、イスラエル民族の信仰の体験と理解が長い歴史の中で言い伝えられ、書き記され、編集されて現在の形にまとめられたもの。ユダヤ教にとっては古い契約（つまり、むかしから神からの約束）の書という名称は不本意で、むしろ「ヘブライ語聖書」と呼ぶべきものである。これに対して「新約聖書」とは、イエス・キリストの弟子たちと、その指導を受けた初期の教会の人々が自分たちの信仰を書き表した文書を集めたもので、原文は当時の世界の共通語であったギリシア語です。さまざまな文書が含まれているが、全体を通じて、イエスこそ旧約聖書の中に記されている「メシア」、「キリスト」であり、旧約の神と民との契約がその新しい契約によって真の完成を見たとして、「新約聖書」と呼ばれる」。

（以上は百瀬師の説明の仕方からとったものですが、キリスト教入門として一番皆さんにすすめたいのは次の書物です。百瀬文晃著『…』、教友社、2004－5年。または次のものも参照されたいです。百瀬文晃、『キリスト教に問う』65のQ&A, 女子パウロ会；岩島忠彦、『キリスト教についての21章、女子パウロ会；和田幹男、『聖書Q&A』、女子パウロ会；東

京教区キリスト教編集会、『キリストの教え入門』、1992改訂版、あかし書房。

主の祈りを教えたイエス

主の祈りを民衆と弟子たちに教えたイエスは、当時の宗教上の指導者たちから認められず、宗教家らしくないと思われていました。イエスが人々に与えた印象は、一言で言うと、「とらわれない人」でした。マルコ福音書 1, 22 に述べられているように、人々はイエスの教え方を大変不思議に思いました。それは、イエスが当時の宗教家たちのようではなく、確信と力を持つ者のように教えたからです。

イエスは宗教家として、型破りの人でした。ある日など、イエスは手を洗わないまま食卓につきました。ファリサイ人はそれに躓いて、それはゆるされないことだと思いました。彼らに答えてイエスは、「すべて外から人の中に入って、人を汚しうるものはない」と言いました（マルコ 7, 15）。まさにこの言葉から、「とらわれない心」を読みとることができるでしょう。

ところで、当時の宗教家たちに受け入れられず、民衆の側に立ったイエスは、革命家に利用されることも断りました。この意味でも、イエスはとらわれない人でした。

また多くの人々が期待して持っていた救い主のイメージの枠にも、イエスは当てはまりませんでした。イエスの親族も、イエスを利用することができませんでした。「親戚の者たちはこのことを聞いて、イエスを取り押さえに出てきた。気が狂ったと思ったからである」（マルコ 3, 21）。「イエスの母と兄弟たちとがきて、外に立ち、人をやってイエスと呼ばせたときに、群衆はイエスを囲んで座っていたが、『ごらんなさい。あなたの母上と兄弟・姉妹たちが、外であなたを尋ねておられます』と言った。すると、イエスは彼らに答えて言われた、『私の母、私の兄弟・姉妹とは、誰のことか』と。そして、自分を取り囲んで、座っている人々を見回して、言われた、『ごらんなさい、ここに私の母、私の兄弟・姉妹がいる。神のみ心を行うものはだれでも、私の兄弟、また姉妹、また母なのである』」（マルコ 3, 31-35）。

このようにイエスは、当時力を持っていた、政治家、インテリなど、支配階級と呼ばれる人々、さらに富者たちから利用されることも、彼らと妥協することさえも、断りました。

他方では、ファリサイ人から食卓に招かれ、その家の食卓についてのこともあります（ルカ 11, 37）。そしてまた、貧しい民衆と食物を分かち合ったこともあります。

このとらわれない心というイエスの態度の背後にあったのは、父なる神、天の父に対する信頼と、天の父の目ですべての人を差別なしに見ることでした。

要するにイエスの教えの根本は、天の父がいる、兄弟・姉妹の世界を創り続けていこうではないかということです。この天の父のもとでの兄弟・姉妹の世界が、「神の国」です。この「神の国」を建設していくために、イエスはただ、身分の低い人や高い人と交わっただけでなく、社会の中でのけものにされているような人々のことを特に心がけたのです。当時悪評の高い収税人や娼婦のことさえも、イエスは親切に、自分の弟子の仲間に入れました。そのために宗教上の指導者たちから宗教家らしくないと非難されるようになりました。

ところで、イエスのこの態度を支えていたのは、一つの重大な秘密、すなわち天の父と自分とのつながりでした。

イエスと天の父

イエスは天の父について語る時、自分自身の存在の最も深い秘密をほのめかしました。天の父に向かって祈るイエスの姿を見て、弟子たちはイエスのその秘密を垣間見るようになったのです。

イエスが神に向かって「父よ」と呼びかけるときには、私たち人間がそうするときとは全く異なる独特な意味があります。なぜなら、神のことを自分の「父」と呼ぶイエスは、まことの人間であると同時に父なる神の御独り子でもあるからです。「私を見た者は、父を見たのだ。私は父の中におり、父は私の中におられる」（ヨハネ 14, 6-11）。

私たちも神に向かって「父よ」と呼びかけるようにと、イエスは私たちに教えました。私たちが父なる神に向かって「父よ」と言うのは、御ひとり子であるイエスによって、イエスとともに、イエスのうちにおいてです。そのとき私たちも、父なる神の御独り子であるイエス・キリストとつながって、より深い意味での神の子となります。

イエスとともに天の父に向かって祈る

キリスト者の礼拝の集いの中で用いられている祈りの中には、「キリストによって、キリストとともに、キリストのうちに」という言葉があります。この言葉は信仰の根本的姿勢を表しています。その姿勢は一言で言うとイエス・キリストとともに天の父に祈る姿勢です。キリスト者はイエス・キリストによってこそ、天の父、父なる神を認めるようになります。

ヨハネ福音書で言われているように、神を見たものは一人もいないが、御ひとり子であるイエス・キリストが神のことを現してくださり、さらに天の父への道を教えてくださったのです。イエス自身がその道であるのです。なぜなら私たちはイエスによって神が愛そのものであることを知るようになるからです。

私たちはイエスに励まされて、この世の中に色々な矛盾があるにもかかわらず、また私たち自身の中に多くのエゴイズムがあるにもかかわらず、いずれ私たちも神から授けられる愛をもって人々を愛することができるようになるという希望を与えられます。

つまり私たちは、イエスによって神を信じるようになるだけでなく、愛を信じるようにもなるわけです。なぜなら、イエスが教えてくださった天の父が、イエスの生き方によって愛として啓示された神が、その愛の証を立てたからです。キリスト教の信仰とは、キリストによって神を信じるという信仰です。「神は御ひとり子によって、私たちに語られた」) (ヘブル書 1, 2)。

ところで、キリスト者は神を信じるだけでなく、キリストとともに神を信じると言わなければならないでしょう。イエスにもある意味で信仰があったと言えれば驚く人がいるかもしれませんが、「信仰」という言葉を狭義にとると、その驚きは当然のことでしょう。自分が神でありながら神を信じるとは無意味ではないかと言うのでしょうか。

しかし、イエスがまことの人間でもあるということをおぼろげに忘れてはなりません。イエスはまことの神でありながら、まことの人間でもあります。

「信仰」ということばは、決して、神が存在することを頭で認めるといだけの狭い意味ではありません。信仰の根本は、愛をもって、愛である父なる神に答えながら、自分を父なる神に全面的にゆだねるということです。この意味でイエスは、ヘブル書 12, 2 に記されているように、まさに、「信仰の完成者」であり、その「先駆者」です。イエス・キリストはわたしたちの兄弟として、父なる神に自分をゆだねます。そ

して私たちは、エゴイズムと弱さを持っているにもかかわらず、イエスとともに自分を父なる神にゆだね、愛し、愛を信じる力を与えられるのです。

「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか」（ヘブル書 12, 2-8; 6, 9-15; 12, 2）。

私たちはこの言葉を、希望に満ちた時だけでなく、絶望をしそうな時にも思い出したいのです。私たちも時として、ご受難とご死去の前のイエスの祈りを、イエスとともに父に向かって唱えなければならないことがあるのです。「イエスは恐れおののき、また悩みはじめて、言われた、『アッパ、父よ、どうか、この杯を私から取りのけてください。しかし、私の思いでなく、御心のままになさってください』」（マルコ 14, 33）。「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」（マルコ 15, 3）。「父よ、私の霊をみ手にゆだねます」（ルカ 23, 46）。

ここまで述べたことから、信じることの逆説が現れます。つまり、信じることは、ある意味で、信仰者自身の大切な決断ではありますが、同時に上から自分に与えられたものでもあるということです。

このように信仰には、自分から積極的に歩み出す要素と、自分に贈り物として与えられる要素とがあります。この意味で私たちは、キリストによって、キリストとともに信じるだけでなく、キリストのうちに、つまりキリストとつながって、キリストから生かされて、信じるようになるのです。

言ってしまうえば、私たちはキリストによって信じさせられるようになります。パウロはいみじくも、「生きているのは、もはや、私ではない。キリストが、私のうちに生きておられる」（ガラテヤ 2, 20）と言っています。

信じるということ

神を信じることは、神が存在することを認めるだけのことではありません。信じることと知ることとは違うことです。信仰では、認識よりも信頼の面が大事なわけです。

信仰には当然なこととして、分らないことと疑いが伴います。信仰には必ず、ある「飛躍」とでも言うべき面があります。というのも、信

じるとは、信じさせられることではないからでしょうか。誰によってかと言え、神自身によってです。マルコ9, 24にある「不信仰な私をお助けください」ということばは、信仰者の祈りです。

信じるとは、ある特定の内容を頭で認めることよりも、生活全体にわたる、ある生き方の基本的姿勢です。神を信じると信じないとは、日々の生活、人間関係、直面する出来事などの意味が変わってきます。

信仰へと招くしるし、神からの最高のしるしは、イエスの存在そのものです。「信じる」とは、キリストによって自分の生き甲斐を見いだすことです。自分の生活に意味を、人生に目的を、宇宙の歴史に方向付けを与えてくれるものを見いだすことです。

信じるとは自分の属している共同体の価値観におぶさったり、地に足をつけずに歩いたりすることではなく、自分の生きる基盤を、神からこの世に送られたイエスに確信を持って置き、イエスによって与えられる希望に支えられて生きることです。このような希望を持つときに、兄弟愛と平和に満ちた世界を建設しようとする努力は、真に有意義なものとなります。

このように信じる人は、この世界の改善のために努力しながら、自分の抱いている希望がこの世界を越えたものに根ざしていることを認めます。信じる人は、どのような困難に出会っても、最後にはキリストによって悪からも死からも解放されるという希望をもっています。そうした希望の源である父なる神に自分をゆだねるとき、初めて人は信じることができたと言えます。

こうした信仰に生きることは、いつの時代にも勇気のいることですが、今日では、なおさらそうです。生きるのに勇気がいるとすれば、信仰に生きるにも勇気がいります。しかも神から与えられる勇気が・・・人間は自力では信仰に生きることはできないのです。

信じるとは、一つの行為 (act) であるよりも、一つの過程 (process) であると言えるでしょう。信仰への道を歩んでいる者のうちにも、おそらく本人が気づいている以上の信仰があるかもしれませんし、信仰者のつもりでいる者にも、信仰の火が消えてしまったり、明滅したりしているかもしれません。

信じて行く過程においては、神からの招きが人間の努力に先行します。神が人間の歴史の中で自らを表し現し、言葉と業とをもって、人間に呼びかけるしるしを与え、その啓示の頂点としてキリストを遣わしま

す。私たちのように直接に生前のイエスに接する機会のない者は、その信仰をあかし証するキリスト者の共同体から招かれます。

人はあるキリスト者の生き方を通して神へと導かれることが多くあります。要するに、神は人を通して私たちを招かれます。この具体的・社会的・歴史的な招きのほかに、心に聞こえる神の声という内的な招きもあります。

この招きに応じて私たちに要求されるのは、一言で言えば、「己をゆだねる心」なのです。これは、信じて行く過程において不可欠の条件です。神の言葉を受け入れ、それに聞き従うことは、パウロにとって、信仰のもっとも大切な点であったに違いありません（ローマ書 1, 5 ; 16, 26 ; 1 コリント 10, 5-6）。

時代によっては、信仰のこの面が忘れられ、その他の面のみ、つまり、啓示の内容を頭で納得することだけが強調されたこともあります。しかし今日ではもっとバランスのとれた見方を取り戻して、「己のすべてを神にゆだねる」ことを強調するのが普通になってきました（第二バチカン公会議『啓示憲章』5）。

自らの信仰に確信を持っている人でも、時には過ちを犯すことがあります。いわゆる信心業に固執すると、善意からとは言え、迷信に走ったり、狂信にかられたりすることがあります。だから信仰者はみんな、つねに常に自らの信仰を反省し、浄化する必要があります。これは信仰の知識の多少にかかわらず、あらゆる信仰者に負わされている課題です。信仰についての知識のとぼしいものは、迷信に陥らないよう警戒を怠らず、他方、知的な面で恵まれた者は、理論に走って素朴な信仰の眼を曇らせないように注意すべきでしょう。

信仰者にとってある真理を認めることは必要ですが、それだけでは信じることにはならないのです。単に神が存在することを認め、あるいは神が語られたことを認め、語られたその内容を受け入れるだけでなく、神に自分をゆだね、神の愛を信頼し、神によっていわば信じさせられて、心から自分の一切を神に任せることが大切です。

「汝なる者を信じる」のは、キリスト者の信仰の本質的な要素でもあります。「人を信じ、人を愛する」ということが、これを理解するためのヒントを与えてくれるでしょう。たとえば、二人の男女が互いに惹かれ合うとしましょう。もし二人が盲目的に本能の赴くままにふるまい、欲望を満たすだけなら、たとえ「あなたを信じる」と言っても、

二人の愛が長続きすることはないかもしれませんが。だからと言って二人が自分たちの愛を科学的な明晰性をもって確かめられる日まで待つとしたら、その二人は永久に結ばれないでしょう。真実の愛と、それに伴う信じ合いは、盲目だけではありえませんが、その反面には一種の飛躍があるのです。

このたとえば、わずかながら神への信仰の特徴を映し出しています。神への信仰は、盲目的な信条に過ぎないものであってはならないと同時に、どうしても合理化しきれない何かを持っているはずで、それゆえ信じるためには勇気がいるのです、ただし、この勇気は神から与えられるものです。

信仰宣言

信仰告白

キリスト教の信仰を表す「使徒信条」という文には昔から聖書にもと基づいて信仰告白が次のようにまとめられました。

天地の創造主、
全能の神である父を信じます。
父のひとり子、わたしたちの主イエス・キリストを信じます。
主は生霊聖霊によって人となり、おとめマリアから生まれ、
ポンティオ・ピラトのもとで苦しみを受け、
十字架につけられて死に、葬られ、死者のもとに下り、
三日目に復活し、天に上って、
全能の神である父の右の座に着き、
生者と死者を裁くために来られます。
聖霊を信じ、聖なる普遍の教会、
聖徒の交わり、
罪のゆるし、
からだの復活、
永遠のいのちを信じます。アーメン

カトリック教会のミサ（信仰者の集いである「感謝の祭儀」）の中では次のように「信仰宣言」が唱えられています。

天地の創造主、
全能の神である父を信じます。
父のひとり子、乙女マリアから生まれ、
苦しみを受けて葬られ、
死者のうちから復活して、
父の右におられる主イエス・キリストを信じます。
聖霊を信じ、
聖なる普遍の教会、
聖徒の交わり、
罪のゆるし
からだの復活、
永遠のいのちを信じます。

今ここでこの信仰宣言の真髓を手みじかに把握するためにその三つの部分すなわちイ) 父なる神、ロ) イエス・キリスト、ハ) 聖霊について一言ずつ述べ対のですが、その前にこの信仰告白の言葉の短い説明を挙げておきましょう。

天地の創造主

すべてのものの根拠であり、全てを創造し、支え、導く。

全能の神である父を信じます。

すべての力を超える力、命いのちの源、父や母と呼ばれる愛の源。

父のひとり子

イエスと父なる神に絆というよりも「一致」を表す言葉。

乙女マリアから生まれ

神でありながら真の人間となったキリストは「女から生まれた」。

苦しみを受けて

無実でありながら処刑された、愛に徹したあかし証。

葬られ

本当に死んだ。イエスの死は芝居ではなかった。

死者のうちから復活して

もう二度と死ぬ事がない永延永遠のいのちに入った。

父の右におられる

永延永遠の命いのちに入ったイエスは悪と死にうち勝ったことを表す言い方。

主イエス・キリスト

主は神。イエス・キリストは、イエスはキリストであるということの省略。

信じます

信頼して委ねます。

聖霊を

父なる神の息吹、キリストの息吹。

聖なる普遍の教会

聖人ででないにもかかわらず、我々は神によって聖とされます。普遍を目指して、全人類の一致の徴になろうとし、その一致の建設に役立てようとする教会。

聖徒の交わり

聖なるもの者の詰まり集まり、キリストの祭壇を囲んで集う教会、キリストの霊（息吹）によって集められた共同体

罪のゆるし

神から離れた状態としての野罪に対する神との絆の回復

からだの復活

復活したキリストの体との完全な一致

永遠のいのちを信じます

死後の世界を描写しない。それよりもしんで死んでも神から見捨てられることがあり得ないという信仰。

天地の創造主、全能の神である父

「全能」という言葉について二つの幼稚な捉え方があります。一つは、神は何でもお出来になるのだから、どんな罰があたるか分からないという受け止め方であり、二つ目は神は何でもお出来になるのだから、何でも与えてくださるだろうという受け止め方です。両方とも自己中心的な態度です。創造主に関して誤解があります。ただ単に、昔、神は世を創られたとだけ理解するのでは不十分です。全能の創造主への信仰は、次の二つの要素を含みます。それは、過去において私たちを創り、現在において私たちを支え、未来に向かって私たちを導いてくださる方が、すべてのものの根源であり、私たちはいつもその方の内に生きており、その方によって生かされているという信仰です。そうした神こそ、イエスが教えてくださった天の父です。漠然とした神ではありません。イエスが教えてくださった天の父が、わたしたちが神について抱いているちっぽけなイメージをはるかに越える方であることを知ると、他宗教との対話がどんなにか寛容になることでしょうか。

「全能」ということばと関連して、次のことを付言しておきます。神を、私たちの弱さを助けて下さる方（力）として捉えるのは簡単かもしれませんが、実は神は私たちの弱さを助ける力だけではなく、私たちの力の力でもあり、私たちの力を力たらしめる方でもあります。

イエス・キリスト

「イエス・キリスト」という名は、「イエスはキリストである」という私たちの信仰を一言で現したものです。その文章の主語はイエスであり、述語はキリストです。この述語をさまざまな表現で置き換える

ことがあります。たとえば、「救い主である」、「神の子である」、さらに「私たちの希望である」ということです。

イエスが教えてくださった根本的なことは、天に父/母なる神がおられるから、人間には希望があるということです。十字架につけられて死なれたそのイエスが、永遠の命いのちに入り、今なお生きておられるということが、その希望の根拠です。

キリスト教の信仰の内容を要約すると、「イエスは私たちの希望の根拠である」となります。ここで重要なのは、具体的な歴史上のイエスの姿です。ここにキリスト教の大きな特徴があります。キリスト者は神を、自分の心や大自然の中に見いだすだけではなく、歴史の中で具体的な姿をとった者として見いだすのです。

新約聖書の中では、この信仰はいろいろな形で表されています。まずキリスト者の初期共同体は、使徒たちの次の教えを保ち続けます（使徒言行録 2, 42）。ナザレのイエスは救い主であり、十字架に付けられた後よみがえって生きておられます（同上、4, 10）。パウロは会堂でイエスが神の子であることを説教していた（同上 9, 20）と書いてあります。1コリント 15 章には、キリストの死と復活を中心にした、もっとも古い信仰告白があります。信仰に入る人に求められる信仰告白は、イエスが主であり、神によって死からよみがえったということです（ローマ書 10, 9）。

この信仰告白は信仰者の一致の根拠です。「主は一人、信仰は一つ、神は唯一唯です」（エペソ書 4, 5-6）。典礼の中で使われる「アーメン」とい言う言葉は「然り」という意味であって、次の二つのことを意味します。一つは神が私たちに向かってキリストを通して「アーメン」と仰せられたということであり、もう一つは私たちがキリストを通して「アーメン」と神に向かって言うということです（2コリント 10, 20）。

先に引用した箇所他に多く引き合いに出すことができますが、短い重要な信仰告白として、少なくとも次の三つをよく参考にしておきたいと思います。

「われわれには唯一の父なる神がいるのみ、その方から万物は出で、われらはその方へと向かう。そして唯一の主イエス・キリストがいるのみ。その方によって万物は成り、われらもその方による」（1コリント 8, 6）

「あなたがあなたの口で主イエスを告白し、あなたの心のうちで、神はイエスを死者の中から起こした、と信じるなら、あなたは救われる」
(ローマ書 10, 9)

「一人の主、一つの信仰、一つの洗礼、唯一の神にしてすべてのものの父であり、すべてのものの上に、すべてのものを貫いて、そしてすべてのものの内にいる方・・・」(エペソ書 4, 4-6)

聖霊 (神の息吹)

「父と子と聖霊」と言われますが、私たちはむしろその逆の順序で神に至りません。すなわち、聖霊によってキリストを通して父なる神へと至るのです。使徒たちにとってもそうでした。ヨハネ 16, 12-15 のイエスの言葉に、「聖霊は弟子たちに、イエスが誰であるかを示し、天の父のことを現してくださるであろう」とあります。

わたしたちの場合には、共同体の現実の中でも、個人の心の中でも、聖霊はイエスと父を現してくださいます。大自然を通して、共同体と歴史を通して、そして私たちの心の中に聞こえる神の声を通して、聖霊は父なる神を私たちに現してくださるのです。

信仰告白の中でわたしたちが言う「信じます」という言葉は、聖霊によって言えるものです。「聖霊を信じ、教会を信じ、罪の赦しと、体の復活と永遠の命を信じる」という表現がありますが、これは正確には、聖霊を信じ、教会という場において神を信じ、そして罪のゆるしと永遠の命に向かって信じるということです。

罪のゆるしを理解する出発点も聖霊です。聖霊は新しい心を私たちのうちに創造するからです。そして体の復活を信じるとは、父なる神が私たちに対して、イエスになさったのと同じようになさってくださるであろうと信じることです。私たち一人一人の生涯、人類の歴史、また宇宙全体も、父なる神によって新しくされるだろうと信じることです。

ローマ書 8, 11 を思い出しましょう。体の復活と創造主である聖霊自身による人間の再創造についての箇所です。それは単なる肉体のよみがえり以上のものです。それが 1 コリント 15, 44 で、難解ですが深い表現でのべられて述べられています。

ヨハネにみる信仰の要点

ここまで述べてきた信仰の理解によって、福音の真髄というものはキリストだと言うことが明らかになったと思います。では、ヨハネにみる福音の真髄を表すような表現を集めて以下のようにキリスト教信仰告白の内容を表すことができます。

1. われわれの父なる神は、まずなによりもアガペーすなわち愛です（1ヨハネ4, 8参照）。
2. イエスは、父なる神がアガペーであることを教え、また父なる神への信仰もアガペーを生きることであることを示しました。「神はそのひとり子を世に遣わし、彼によってわれわれを生きるようにしてくださった。それによって、われわれに対する神の愛が明らかにされたのである」（1ヨハネ、4, 9）。
3. 人の世にエゴイズムは支配的である。人間の状況は、そのままアガペーへの理想へと導くとは言えない（1ヨハネ、2, 16参照）。
4. そこで、父のアガペーに答えて、完全なアガペーをもって自己をささげたのがイエスです。「主は、われわれのために命を捨ててくださった。それによって、われわれは愛ということを知った」（1ヨハネ、3, 16; ヨハネ、13, 1参照）。
5. イエスが捧げたアガペーは、人類全体のあらゆるエゴイズムを癒すばかりでなく、それ以上のはかり知れない無限の価値を持つものです。「み子イエスの血が、すべての罪からわれわれを清める」（1ヨハネ、1, 7）。「彼は、われわれの罪のための、贖いの供え物である。ただ、我々の罪のためばかりでなく、全世界のつみ罪のためである」（1ヨハネ、2, 2）。「み名のゆえに、あなたがたの多くの罪がゆるされた」（同上、2, 12）。「彼は罪を取り除くために現れたのであって、彼にはなんらかの罪もない」（同上、3, 5）。「我々が神を愛したのではなく、神がわれわれを愛してくださって、われわれの罪のためにあがないの供え物として、み子をおつかわしになった。ここに愛がある」（同上、4, 10）。
6. 真の人、真の神としてのイエスが完全なアガペーの姿を示し、父によって受け入れられた。「われわれは、父が御子を世の救い主としてお遣わしになったのを見て、その証をするのである。もし人が、イエスを神の御子と告白すれば、神はその人のうちにいまし、その人も神のうちにいるのである。われわれは、神がわれわ

- れに対して持つておられる愛を知り、かつ信じている。神は愛である」(1ヨハネ、4、14-16)。
7. そして、イエスのおかげで、しかもイエスとともに、われわれは父から受け入れられる。「われわれの罪のためにあがないの供え物として、御子をお使わしになった」(1ヨハネ、4、10)。「み子を持つ者はいのちを持ち、神のみ子を持たない者は命をもっていない」(同上、5、12)。それは、イエスを通して、イエスのうちにあって、われわれにも神の子となる恵みを与えられるからである。「われわれが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜ったことか、よく考えてみなさい。われわれは、すでに神の子なのである」(1ヨハネ、3、1)。
 8. これは言い換えれば、イエスのうちにあってはじめて、われわれにもアガペーへの道が開かれ、それに徹して生きるために力が与えられたということである。「神はその一人子を世につかわし、彼によってわれわれが生きるようにしてくださった」(1ヨハネ、4、9)。「神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神を彼にいます。そのことによって、愛がわれわれに全うされているのである」(1ヨハネ、4、16-17)。
 9. このようにヨハネが語るわれわれの救い主に対する信仰には二つの側面があります。つまり、「罪のゆるし」と「永遠のいのち」。まず、我々の罪を取り除くための供え物としてみ子が遣わされたことを、われわれは信じています(1ヨハネ、4、10)。ところが、これは「われわれが救われた」ことの一面にすぎません。「われわれを生かし、われわれに命いのちを与えるためにみ子が遣わされた」と言えば、よりよく表現できるでしょう(1ヨハネ、4、9)。
 10. この永遠の命は、いますでに信仰によってわれわれに与えられています。「{われわれは今や神の子である」。とは言え、その姿はまだ完全には現れていません。「しかし、われわれがどうなるのか、まだ明らかではない。そのまことの御姿を見るからである」(1ヨハネ、3、2)。
 11. その時を待ち望んでいるわれわれは、神の恵みに支えられてアガペーに生き、イエスの心にある真の愛に基づくコイノニア(共同体)を形成していきます(1ヨハネ、1、3)。この精神を抱き、信仰の目でこの世を見、真の愛の実現につとめる時、今の世の中

に真の明るさと喜びが溢れるにちがいないのです。「闇が消え去り、まことの光が輝いている」。キリストの心をもって人を大切に
にする者は、光のうちにとどまります（1ヨハネ、2, 8-10）。

12. 以上のことを要約すれば、「イエス・キリストにおいて、われわれに永遠のいのちが与えられている」ということになります。「この永遠のいのちを、あなたがたに告げ知らせる。この永遠のいのちは、父と共にいましたが、今やわれわれに現れたものである」（1ヨハネ、1, 2）。「これらのことをあなた方に書き送ったのは、神の子のみ名を信じるあなたがたに、永遠のいのちを持っていることを、悟らせるためである」（1ヨハネ、5, 13）。ここにキリスト教のメッセージの中心があります。つまり、「神が永遠のいのちをわれわれに賜り、かつ、そのいのちが御子のうちにある」（1ヨハネ、5, 11）。

キリストによってキリストとともにキリストのうちに

感謝の集い（ミサ）の中でその中心の部分（奉献文）の頂点に歌われる詠唱があります。それは「キリストによって、キリストとともに、キリストのうちに、聖霊の交わりの中で、全能の神、父であるあなたに、すべての誉れと栄光は、世々に至るまで、アーメン」という文句ですが、この言葉もまた信仰告白の要約でもあります。

では、この言葉を手がかりにしてキリスト教信仰のもうひとつのまとめかたをこころみましよう。

キリストによって

キリスト教の信仰は、キリストによって父である神を認めるものです。ヨハネが言うように、神を見たものはいない。独り子、イエス・キリストだけが神を解き明かしたのです。私たちに真の愛の道を示し、その道を歩む力を与えるイエス・キリストによって、私たちは、「神が愛である」ことを見つめ、「愛の根源」であり、父である神を信じるようになります。私たちが、この世の種々の悪や矛盾にもかかわらず、また、自分自身のエゴイズムに妨げられながらも、愛なる神を信じ、「愛を信じる」ようになるのは、父である神がイエス・キリストによ

って、愛の完全な証を具体的に立てたからです。この意味において、キリスト教の信仰は「キリストによる」信仰です。

これを考えるために、次の聖書の言葉が挙げられます。

「神は・・・御子によって、私たちに語られた」（ヘブライ人への手紙、1, 12）。

「言葉は肉体となって、私たちのうちに宿った」（ヨハネ、1, 14）。

「永遠のいのちとは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることでもあります」（ヨハネ、17, 3）。

「これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によっていのちを得るためである」（ヨハネ、20, 31）。

「父のほかには、子を知る者がなく、子と、子が父を知らせようと心に定めた人のほかは、だれも父を知る者はありません」（マタイ、11, 27）。

キリストとともに

キリスト者は、キリストを信じると同時に、キリストとともに神を信じるのです。キリストは神でありながら真の人間である以上、私たちの信仰の対象であるばかりでなく、その「道」、「仲介者」、「模範」でもあります。信仰という言葉を狭い目でとれば、「キリストにも信仰があった」という表現はおかしく聞こえるでしょう。しかし、信仰の根本とは、愛をもって愛である父に答えて、父に自己を全くゆだねることであると理解すれば、キリストは「信仰の完成者である」（ヘブライ人への手紙、12, 2）という表現の適切なことがわかるでしょう。

エゴイズムをなかなか捨てきれない私たちは、キリスト、特に私たちの兄弟として、その弱さを背負うキリストを見る時、キリストとともに愛し、信じる力が与えられます。これを聖書は次のように表しています。

「私は道であり、いのちである。だれでも私にたよらないでは、父のみもとに行くことはできない」（ヨハネ、14, 6）。

「神は唯一であり、神と人との間の仲介者もただひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである」(1テモテ、2, 5)。

「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つ、走ろうではないか」(ヘブライ、12, 2; 8, 6; 9, 15; 12, 24)。

「イエスはおののき、また悩みはじめて、言われた。『アッバ、父よ、・・・どうか、この杯を私から取りのけてください。しかし、私の思いではなく、みこころのままになさってください』(マルコ、14, 33)。

「父よ、私の霊をみ手にゆだねます」(ルカ、23, 46)。

キリストのうちに

「キリストの内に」という言葉に含まれる深い意味は、簡単には表せません。私たちは、キリスト者共同体(教会)を生かし、信仰者を一つに結び、その中で働きかけるキリストの息吹によってはじめて、心を神に向けることができます。キリストの息吹、すなわち聖霊のはたらきによってこそ、私たちは信じることができるようになります。

キリスト者の共同体のことを「聖霊の場」と呼べますが、まさにキリストの霊の吹き場においてしか、信仰心は本物にならないのです。そのため、信仰と祈る心はどうしても切り離すことができません。ここに信仰の逆説もあります。つまり、信じるとは、信仰者個人のもっとも主体的なものですが、それでいて無限にその個人を越えた面もあります。信じるのは私であるとはいえ、それは表面的な自我ではなく、もっとも深いところの大我というか、キリストと結ばれ、キリストのうちにある自己です。この意味からして、キリスト教の信仰はまさに、キリストのうちにあっての信仰であると言えます。

このことを聖書は次のように述べています。

聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」ということができない。(1コリント、12, 3)

生きているのは、もはや、私ではない。キリストが、私のうちに生きておられるのである(ガラテア書、2, 20)

あなたがたは聖なる者に油を注がれているので、あなたがたすべてが、そのことを知っている。(1ヨハネ、2, 20)

わたしを遣わされた父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしに来ることはできない（ヨハネ、6、44）

神はキリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、私たちの心を照らしてくださったのである。（2コリント、4、6）あなたがたの心の目を明らかにしてくださるように。（エペソ書、1、18）

どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなた方の内なる人を強めてくださるように。キリストがあなたがたの心のうちに住むように・・・。（エペソ書、3、16-17）

いったい、「だれが主の思いを知って、彼を教えることができようか」。しかし、わたしたちはキリストの思いをもっている。（1コリント2、15-16）。

信仰の語りと教理の発展と解釈

葛藤がたかまる

イエスが福音を述べ伝えていた頃のイスラエルでは、さまざまな戒律が神の教えに基づくものとして、厳格に守られていた。しかし戒律に捕らわれすぎると、人間性が損なわれる恐れもあります。たとえば当時のイスラエルの律法では、人が安息日に働くことは禁じられていました。ところが、イエスの弟子たちは安息日に麦の穂を摘み、イエス自身も手のなえた人の手をなおします。「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない」（マルコ2・27－28）とイエスは言って律法の権威に疑問を投げかけたのです。また、「福音はまずすべての民に述べ伝えられなければならない」（マルコ13・10）と言って、救いがイスラエルの民にかぎるのでないことを強調したりもしました。

このようにイエスは独自の権威をもって、神の福音を述べ伝えていきました。当時のイスラエルの人々は、このイエスの態度を見聞きするにつれ、イエスの評価をめぐって意見が分かれました。「この人は偉大な予言者だ」といってイエスに付き従う人もいれば、また反対に、イエスを指し、「この人は悪魔つきだ」と非難する人もいました。

また当時、政治的救世主の出現を待ち望む人たちもいました。この人たちは、イエスがイスラエルの救世主として、その国の独自のリーダーとなることを期待していました。ところが、そのような期待に反し、イエスは「人の子の来たのも、仕えられるためではなく、仕えるため」（マルコ10・45）であると言い、政治的リーダーとしてかつがれることを拒むのです。このようなイエスの言葉を聞いた人々は期待が外れて、失望の色をかくせません。また当時の既成宗教の指導者たちは、イエスのように戒律を重んじない態度を取る者が民衆をひきつければ、社会的にも政治的にも既成の宗教がゆらぎ、自分たちの立場があやうくなることを恐れました。彼らは自分たちの周辺にそういう人物がいるのは望ましくないと考え、イエスを危険な存在とみなしただけではなく、民衆にもそう思わせるよう扇動しました。

イエスに対する一般の人々の戸惑いと、支配者層の思惑のうちにあって、イエスがどのような態度を示すかが人々の注目を集めま

した。あのよう権威をもって語り、在来の戒律に反するような行いをなし、数々の奇跡を行って病人をいやすのです。この人はただの預言者だけではなさそうですが、いったい何者なのでしょう。人々は驚きと戸惑い、恐れと期待をこめてイエスを見守っていました。民衆の待望望を集めたイエスの言動が、今後のイスラエルの政治・宗教の運命に深くかかわっていることを、人々は敏感に感じ取っていたからです。このようなことはいつの時代にも、律法やきまりや習慣や伝統や国などよりも、人を大事にし、正直に生きようとする人の身に当然起こることです。

イエスの裁判と死

もしイエスがイスラエルをローマの支配から解放しようところみる者であったならば、当時ローマの圧制にあえいでいたパリサイ人は、イエスを罪に陥れようとはかるところか、かえってイスラエル人の指導者として喜んで受け入れたでしょう。ところが、イエスは期待に反して、自分が政治的な指導者でないことを明らかにしただけでなく、当時の律法主義者の態度にあからさまな批判を投げかけました。ここにおいてイエスの存在は、パリサイ人にとって許し難いものとなったのです。

そこで彼らは、イエスに「にせものの預言者」とうレッテルを貼るとともに、一方では、イエスは民衆を扇動して、ローマの反抗をはかる危険な存在であると言いつらしました。当時の支配者であるローマ人に対してイエスを法的に告訴するためには、なんらかの政治的な理由をあげる必要があったからです。

イエスが一部の人たちから罪に問われる直接のきっかけとなったのは、神殿の境内から商売人を追い出したことでした（ルカ 9.45-48）。神殿の清浄を守ろうとしたイエスの言行は、とりもなおさず、祭司長や、律法学者たちの権威の否認を意味したのです。彼ら権力者たちは、自分たちの権力を認めないイエスが衆望を集めているのをねたみ、何とかしてイエスをなきものにしようとたくらみ始めます。そして、当時の政治的支配者に対し、イエスが民衆を扇動するものであると訴え出たのです。支配者であったピラトスとヘロデはイエスを取り調べたのですが、何らの罪も見出すことができず釈放しようとしていました。

ところが、何としてもイエスを抹殺したいと考えたパリサイ人たちは、人々の群集心理を巧みに操って、イエスを死罪につけるとするよう要求しました。支配者たちも事ここに至ってはイエスを十字架につけるよう決定せざるをえなくなり、ここにイエスの死は確定的なものとなったのです（ルカ 23.24）。

歴史家の目でみれば、イエスの死は多くの預言者と同じように、失敗におわったと映るかもしれません。イエスが預言者として人々に与えるしるしは、合理的な証明をともなうような性質のものではないのです。それゆえ十字架に掛けられたとき人々が投げかけたあざけり、「キリストであるなら、自分で自分を救ってみ

よ」の言葉にもイエスは答えることをせず、十字架上の死を甘受しました。

権力者たちはイエスを殺して一息ついたに違いありません。自分たちの存在をおびやかす危険な人物を抹殺することができたからです。一方イエスこそ救い主と望みをかけていた一般の人々は落胆しました（ルカ 24. 18-21）。しかし、イエスの死を目にした人々の中には、死の瞬間に「この人こそ神の子である」と翻然と悟る者もあらわれたのでした。

イエスの弟子たちと同じようにイエスにひきつけられると同時に、正しい人が十字架に死ぬのを見て失望する気持ちになる人も多いでしょう。換言すれば、この講座の最初からここまで読んでついて行けそうな人も、もしかするとこれから先の所はむしろかしく感じるかも知れません。そこで、イエスの死について詳しく述べるよりも、ともすれば誤解されやすい復活について、詳しく記しておきたいと思います。

端的に言えば、殺されたイエスが今なお生きており、弟子たちにあらわれたという信仰告白からキリスト教が始まり、二千年たった今も、その信仰に生きる人々がいるわけです。

キリスト教信仰者は神がいると認め、その神が人となって人類の歴史の中で自らをあらわしたと信じています。そして彼らはイエスが今なお生きていると確信している人々です。信仰者にとっては、イエスの死こそいのちの始まりであり、それによって信仰者には、自分たちの死を乗り越えて永遠のいのちに至る希望が与えられるのです。

ところが、復活という言葉聞いて、人はそれぞれどんなことを連想するでしょうか。いろいろの誤解もあるでしょうが、それらが溶けることを願って最近の神学の考えを紹介しておきたいと思います。

復活を語る

このテーマについて、20世紀の聖書神学のなかで、特に注目をひいた者として、レオン・デュフルの『イエスの復活とその福音』があげられます。この本が出る前、著者は来日して講演を行いそのあとで『エチュード』誌に「復活したイエスの現存」（1970年）という論文を発表しました。同じころ、スキレベークスはイエスの復活と我々の復活について、またキリスト教の死生観について論じました。この二人の著者の考えを参考にしながら以下にまとめます。

イエスの復活に対する信仰を示す最古の伝承は、福音書ではなく、使徒たちの手紙や、初代教会の賛美歌や信仰告白のうちに見出されます。なかでも代表的なものとして、次の文があげられます。「私が最も大事なこととしてあなた方に伝えたのは、私自身も受けたことであった。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり、私たちの罪のために死んだこと、そして葬られたこと、聖書に書いてある通り、三日目によみがえったこと、ケパに現れ、次に、十二人に現れたことである」（I Co 15 . 3-5）。この伝承は紀元35年まで遡るもので、復活信仰が教会創立のころから表明されていたことが分かります。

次の箇所もこれを明らかにしています。「自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたこと信じるなら、あなたは救われる」（ローマ 10. 9）。

「私たちが・・・死人の中からよみがえった神の御子・・・イエスが、天から下ってこられるのを待つようになった」（1 Thess. 1. 9-10）。

さて、右にあげた引用文中の「葬られた」と「三日目」という二つの言葉について考えてみましょう。まずどうして「葬られた」ことが強調されているのでしょうか。ある人々は、この箇所はイエスが墓を出た事を暗示し、復活の出発点になると言います。一方、「葬られた」ことが強調されるのは、「たしかに死んだ」ことを示すためだと解釈する学者のほうが多いようです。とにかく、右の言葉には二つの留意すべき点があります。

1) イエスは復活し、使徒たちに二現れた、2) パウロも他の証人たちも、イエスの復活の瞬間を目撃したわけではありません。したがって、イエスの復活そのものは、史的認識の対象となりうるようなものではないのです。

次に「三日目に」という言葉は、ホセア書 6. 2-3 やその他の箇所にも見られるように、「救いの歴史における決定的な転換」という意味で用いられています。いずれにしても、1Co 15. 3-5 においては、復活の日付にではなく、イエスの出現に重点が置かれています。

イエスに出会った人々が私たちに会い、私たちはそれに答えて信じるよう、呼びかけを受けているのです。この信仰は、科学的に検証することができる事実とは異なった次元の出来事なのです。

キリスト教の教えの頂点とも言うべき「過ぎ越しの神秘（死からのちへ過ぎ越すこと）」は、一般に「復活」や「死者からのよみがえり」という言葉で表現されます。マルクセンという神学者によれば、「『イエスはよみがえった』という表現は現代人には分かりにくい。むしろ『イエスの仕事や事柄 (Die Sache) がつづく』と言ったほうがピンとくる」と言います。宣教を考えるとこう言うのではなく、聖書の表現を徹底的に解釈した時、この考え方が生まれたのです。これに全面的に同意できないにしても、彼の提起した問題は真剣な考慮に値するのではないのでしょうか。というのも、福音記者たちは出現について述べるさいに、それぞれ独自の表現方法で出来事を記しているので、表現と出来事の間を明らかにするような解釈学が必要とされるからです。このことは、人間が啓示を受け止める時、人間に求められる必要条件であり、すべての人間的コミュニケーションに必要な条件でもあります。

以上のように提起された表現の問題を検討するために、新約聖書の幾つかの表現法を考えてみましょう。まず、死者の復活という表現についてです。

言語というものは、ある意味で経験に先立つと言えましょう。つまり、我々は経験したことを人に伝達しようとするとき、既成の言語を用いるのです。

「イエスはよみがえられた」という表現は、ユダヤの伝統的な言い方を継承したものです。ユダヤ人は、自ら結んだ契約を忠実に守る神に対する信仰に基づき、世の終わりにすべての義人がよみがえると信じていました。一方使徒たちが言うのは、一人の人の復活であり、しかもその性格はまったく独特です。つまり、イエスの復活は世の終わりに起こると期待されるものではなく、今すでに起こった出来事であり、イエスが栄光を受けたことをも意味します。ユダヤ人はこうは考えられなかったでしょう。イエスの復活の出来事はユダヤ古来の表現で表されたのですが、この出来事のユニークな性格が、古来の表現に新しい意味を与えました。すなわち、すべての死者は復活しますが、それはイエスの恩恵によるものであり、またイエスの復活にあやかるものだ、という意味です。

「死者からのよみがえり」を正しく理解するためには、聖書の中では体のことがどのように捉えられているかを、まず見てみましょう。聖書の人間観を見ると、人間は一つの統一体であり、魂と肉体という別個のものが単に寄り合わさったものではないという考えに基づいています。人間全体を表すのが体です。では、人が死ぬとどうなるのでしょうか。死によって物質としての身体が魂から切り離されて滅びる、という見方は死を十分に理解しているとは言えません。むしろ、死とはその人の全体が変容すると言うほうがよいです。

こう見ると、「復活」とは、生前の体を取り戻すことでも、死骸を蘇生させることでもなく、新しい体、新しい存在の仕方、新しい表現の仕方です。復活したイエスは使徒たちに出現したとき、ある種の体によって、自らが生きていることを表現しました。このように、体は単なる物質とは規定出来ず、むしろそれを超えるものです。パウロは、イエスの復活した体を「霊的からだ」と言っています。

ところが、キリスト教がギリシャ化されるにつれて、体は魂と対立する物質とみる考え方が強まりました。そして、「体の復活」というと、肉体から離れていた魂が、自分の肉体を取り戻す機会をどこかで待っているかのように考えられがちでした。イエスについても、生前の身体が生き返っただけだと見るのは、復活を本

当に理解したことにはならないのですが、この点について、ルカから貴重な示唆を得ることができます。

キリストの奥義を語る際、ルカは二つのアプローチをとります。一つは復活という出来事の出発点に焦点を置き、「イエスはよみがえられた」と言います。もう一つは復活後のイエスの新しい在り方を重視し、「イエスは生きておられる」と言います。肉体は魂の仮の宿と考えがちな人々に福音を述べ伝えるとき、ルカは復活という表現が誤解されることを恐れ、後者の「生きている」という表現を次のように、たびたび使ったのです。「死んでしまったのに生きている・・・イエス」（使徒言行録 25。19）。{イエスは・・・自分の生きていることを・・・示し}（使徒言行録 1.3）。「あなた方は、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか」（ルカ 24.5）。

この二つの表現は、いずれも一長一短です。「生きておられる」といえば、たとえば「モーツァルトは生きている」といった比喩的な意味にとられやすい、一方、「よみがえられた」という表現もラザロのよみがえりと同じように受け取られやすいのです。このような誤解を避けるには、「完全に死に打ち勝ったイエスは、永遠に生きている」ことを明らかにする表現が必要になってきます。そのためには、時と場合に応じて「復活したこと」か「永遠に生きていること」のどちらかに重点を置いた表現が望ましいです。二つの表現の背景にある発想法や状況、つまり文脈全体から判断して、どちらかよりふさわしい表現をとらなければならないでしょう。ただ、「なくなったイエスは今生きている」と説明する場合には、「永遠に」生きていると言うべきです。

次の黙示録の言葉は、そのニュアンスを伝えています。

「恐れるな。私は生きている者である。私は死んだことはあるが、見よう、世々限りなく生きている者である」（黙示録 1.17-18）。

いずれの表現を使うにしても、大切なのは、なくなったイエスが今なお生きていること、死に打ち勝ったイエスは、もはや死ぬことがないことです。ナザレのイエスは死ぬことを運命づけられた時間的な存在の次元を超えて、永遠という次元で生きています。それは終末的次元とも言えるのですが、そこでイエスは新しい体（主体）によって自分を表しています。

イエスの過ぎ越しの神秘については、キリスト教の宣教の初めから、もう一つの言い方、「イエスは上げられた」という表現でも表されてきました。そこでは、イザヤの言う「主のしもべ」が思い起こされ、イエスの苦しみと栄光が対照的に扱われています。神はイエスを死者の中から読みがえらせたとい言うよりも、その瞬間にイエスを栄光に上げたことが強調されます。

「キリストは、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、己を低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神はイエスを高く引き上げ、すべての名にまさる名をイエスに賜った」（ピリピ 2.7-9）。

ここでは、イエスの復活は、その出発点である「死者からのよみがえり」よりも、その終点である「イエスが上げられた」事に重点が置かれます。

しかし現時点にだけ目を注ぎ、イエスが今なお生きていることのみを強調すると、その生涯と死になんら意味を認めない神秘主義におちいるおそれがあります。従って、教会は創立当初から「復活」という言葉を用いたのです。とは言っても、「イエスは栄光を受けられた」とか「上げられた」に含まれている明らかな神学的意味を忘れないようにしましょう。そこには「私は世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる」（マタイ 28. 20）という言葉に見られるように、イエスが永遠に生きていることが示されているからです。

復活者との出会い

福音記者たちによれば、安息日の朝早く、婦人たちがイエスの墓に行ったところ、イエスの復活を告げ知らせるみ使いに出会ったと言います。ここで注意すべき点は、彼女らは墓を見てからみ使いに出会ったのではなく、墓を見る前に復活の知らせを聞いたという事です。ほとんどすべての聖書学者が指摘しているように、福音記者たちは復活の事実を証明するよりも、それを告げ知らせることを目的としています。問題は、婦人たちが空の墓を見た事を、われわれが確かに肯定できるかどうかです。聖書のその箇所文学様式から言えば、空の墓についての記録や記述は、「葬り」の記録ほど確かなものではないようですが、研究者によっては、かなりの信憑性が認められています。いずれにしても肝心なのは、出現の際の主と弟子たちとの出会いです。

イエスの出現の記録の記述は、復活したイエスへの信仰を告げ知らせるために記されました。しかし福音書の中の出現の記述とパウロの書き残した出現の記録（1 Co15）とを比較すれば、両者はそれぞれ別個の伝承によっていることが分かります。またパウロへの出現についても、パウロ自身の記述（ガラテア書 1. 13-17 1 コリノ 9. 1 ピリポス教会への手紙 3. 12）と、使徒言行録の中で同じ出来事に触れたルカの記述とは、焦点の合わせ方が異なります。即ち、パウロは直接に使命を授けられたことを強調し、ルカは、使徒的教会とパウロやアプロとの繋がりを明らかにするために、パウロの回心にさいしてアナニヤが演じた役割を強調します。このようなさまざまな相違がありますが、相違と言ってもそれは皮相なもので、根本的には一致していることを念頭において置きましょう。

出現の記述には二通りの表現があることが明らかになりました。その一つは、キリストの過ぎ越しの神秘が、死、葬り、蘇り、空の墓、出現、昇天という一連の出来事によって告げ知らされています。その二つは、一連の歴史的出来事によってではなく、ただ一つの命題でもって「過ぎ越しの神秘」を表すものです。それは、つまり、「イエスを通して、神はみずからの力と栄光を示された」というような信仰告白に重点を置くものです。この両者の

比較対照の結果、「死者からのよみがえり」という言葉はかならずしもイエスの過ぎ越しの神秘の唯一の表現ではないようです。

それではイエスの出現とは一体何なんでしょうか。使徒たちの述べ伝えた体験の中心となるのは、イエスが弟子たちに現れたこと、出現者がイエスだと弟子たちに分かったこと、イエスが彼らに一つの使命を与えたことです。

このイエスとの出会いを主観的錯覚と見なすことも、反対にいえばナマの実況放送のようにみることも、避けなければならない。出現の記述によって、復活したイエスや教会の創立などが明らかにされるところから、それは史的記述とは異なった神学的狙いをもった記述であることが分かります。そこには三つ特徴が見られます。

1) 復活したイエスが中心です。弟子たちはイエスの出現を期待していなかったのですが、意外な時にイエスが自分から現れるのです。弟子たちは死んだイエスに神の力が働き、生きている者として現れたことを体験し、これが彼らの信仰の中核となりました。

2) イエスだということが「分かった」という言葉に要約されるように、弟子たちは亡くなったイエスが今生きていることを体験しました。ただ生前とは異なり、時間と空間を超越し、突然現れては消えます。亡霊ではないのですが、生前の肉体をもって現れたのではありません。パウロはこれを聖霊の力によって変容した霊的な体と言います(1コリント 15)。

3) 弟子たちはイエスを見るだけでなく、その言葉を聞きます。彼らは未来に目を向け、教会を通して宣教の使命を担って、全世界へ派遣されます。そして、イエスがいつまでも生きていることが保証されるのです(マタイ 28.20)。

ここでイエスの復活と歴史との関わりを考える前に、「歴史的」という言葉の意味を振り返っておくとよいです。広い意味で言えば、歴史のある時点に起こったことはすべて歴史的ですが、より狭い意味で、歴史科学で検証されうる出来事しか歴史的価値を認めない立場があります。このように狭義の「歴史的な事実」は、「真実であること」とは区別しなければならないでしょう。ある出来事は歴史科学の対象ではなく、信仰の対象です。そして

信仰から生じる確実性は、学的な歴史研究から生まれる確実性とは異なります。

弟子たちはまず復活したイエスを見たと言うのです。そして、そのイエスとともにいて、話し、食べ、イエスを見るという歴史的体験をしました。出現によって復活は歴史的となりました。われわれは弟子たちの見たものを見てはいないのですが、彼らの見たものを信じています。弟子たちの証言は、キリストのからだである教会の宣教を通して、われわれに呼びかけ、われわれにとっても復活は歴史的となったのです。

われわれに信仰を呼びかける時、イエスは他者として現れるように思われますが、同時にまた、復活したイエスは私たちのうちに内在し、すべての人・時・場にも今なお生きています。それと共に、私たちとイエスとの出会いは、決して史的イエスから切り離して考えることはできません。神の愛は史的イエスを通して、具体的な形をとって歴史に現れました。そして世の終わりまでわれわれと共にいると約束したイエスは、そのからだである教会を通してわれわれの前に二現れ、我々に呼びかけています。

死のかなたに

人間が死後どうなるかということは、イスラエルにおいては長いあいだ問題にされませんでした。それよりも、神に依り頼む信頼をもっと大切にしていました。神に信頼をおくことを知る者にとって、この地の上生活は有意義だとされました。神をよりどころにするこの信頼は、紀元前二世紀ごろには、さらに具体的に表現されるようになりました。たとえば、「なくなった人びとが神に見捨てられることは決してない」とか、「神との一致が死に打ち勝つ」などと表現されました。それでも、当時には信仰者の未来待望を表わす言葉は豊かとは言えなかったのです。

ただイスラエル人にとって、明らかなことが二つありました。一つは死の不可解さ、もう一つは神の慈悲深さである。この相容れないかに見える両者の矛盾を乗り越えるのは、信仰にほかなりません。死は避けられないとはいえ、信仰者が神に見捨てられることはありません。神の慈悲によって、いつの日かまた生きる者となります。イスラエル人はその信仰を「死者のよみがえり」

という言葉で告白しました。この確信は神の民イスラエエルが神との出会いを体験したことから生まれました。みずからの信仰体験を解釈する努力を重ねるうちに、次第に「死者のよみがえり」というふうにそれを表わすようになったのです。

イエスは死に打ち勝った

初代のキリスト者は、前述したイスラエルの言い方を用いて、イエスの生涯と出来事とを解釈しました。正しい人の中でも、イエスがもっとも正しい人という名に値することが分かってきました。正しい人が神に見捨てられることがないとすれば、最大の義人イエスは、なおさら父なる神から見捨てられることはありません。イエスがおくった一生は、死によって無意味になるはずがないのです。死と苦しみを受け入れたイエスは、死に打ち勝って、神に受け入れられ、主とされました。

初代のキリスト者は、復活信仰に基づいて、「イエスの出来事」をこのように、「受け入れられた」とか「上げられた」などの表現で表わしました。さらにこの表現を拡大し、「復活した」と表わすようになりました。これは「イエスは本当に死んだ。しかも、死せるイエスは今なお生きている」という信仰の告白です。

ここで次の点に注意しなければなりません。それは「不滅」とか「存続」という言葉や、「この世」対「あの世」という対立関係を考えるのは、意外とキリスト教的ではないという点です。人は旅人として生まれ、片時も休む間もなく旅をつづけます。そして、旅の途中で死がおとずれ、旅人として死にます。その時、人としてのその自己実現は失敗に終わったのでしょうか。いや、そうではなく、信仰者は神に見捨てられることは決してないという確信に支えられているがゆえに、この現在が永遠化されるのです。今のこの世での生活において、神の愛の勝利が実現しつつあります。神に生きる信仰者はその勝利にあずかっているのです。つまり、自分は神に受け入れられていると信じる時、今この時が永遠化され、はかない人生もとこしえに意味あるものとなります。

こうしたことは、神の賜物でなくてなんでしょうか。「不滅」を願い、「来世」について思いをめぐらせるよりも、神を信頼するほうが大切です。自分が今、神に受け入れられたと信じる時、人はすでに神のいのちにあずかり、永遠に生きるものとなるのです。したがってまことに神を見出した人にとって、死んでから自分がどうなるのかということは、好奇心の対象とはならないでしょう。「死後」のいのちを考えるよりも、自分は神に受け入れら

れているという信仰によって、永遠の生への「復活」をこそ、目指すのです。

この「永遠に神のうちに生きる」とは、どういうことでしょうか。それは、みずからを人に与えるほどの神の愛に、われわれ人間も包まれて満たされ、永遠なものとなることです。そこでは神はすべてにおいてすべてであり、われわれひとりひとはむろんのこと、われわれの自己と他者とのかかわりあいも、この世界も、最も充実した意味あるものとなるのです。

しかしそれが具体的にどう行なわれるかについては何も言われていません（I コリントニ・九参照）。まさにわれわれには想像できぬ神の秘密です。どんなに知恵を絞って、「永遠に神のうちに生きる」とはどういうことなのか、だれも言葉で説明できず、ひたすら神を信頼しつつ信じるしかないのです。

復活信仰こそ神学の出発点

イエスは死にました。しかし弟子たちは、自分たちのうちにやどる聖霊を通して、イエスが自分たちのうちにやどり、自分たちと共にいると体験しました。聖霊の働きによって、弟子たちはイエスの復活を信じ始め、さまざまな問いかけをします。人間イエスと神との関係とは何か、弟子たちが体験している聖霊と人間イエスと神との関係とは何か、といったことです。また、復活したイエスが自分たちのうちにいることを体験して、主とされたイエスは聖霊と同一のものであるという結論に達しました。聖霊によって体験した弟子たちの「復活信仰」のうちに、キリスト論と三位一体論を暗示する手がかりがひそんでいるのです。

キリストの死とその復活を通して、神と人間とは完全に出会ったのです。だからと言って、死という現実の不可解さがなくなるわけではありません。イエスの復活を信じる人は、「新しい人」（1コリント15, 46、コロサイ 3, 10; エペソ 15, 4-24）であり、その人にとって死はすでに克服されています。復活したキリストと共に生きる者は、死に打ち勝つ力を神から与えられているからです。これこそ新約聖書独特の新しさです。イエスはすでによみがえって、永遠にわれわれとともにいると信じる時、この世を変え、歴史に新しい力を与える未来がわれわれに開かれます。

この時点に至ってようやく前述したイエスからの問いかけ、「あなたがたはわたしをだれと言うか」に答えられるのでしょうか。使徒たちの信仰と同じように、私たちの信仰も、死んで復活したイエスとの出会いの体験を通して、はじめてイエスが主であると言えるようになります（1コリントーコリントー二・三）。イエスはキリストであるとか、メシア（救い主という役割をさす称号）であるというだけでなく、イエスは神のひとり子であるという信仰は、復活を認める時、はじめて宣言されるのです。「私を見る人は、私を遣わされた方を見ている」（ヨハネーヨハネー二・四五）。

ふりかえてみると、私たちも弟子たちと同じような過程をたどっていることに気づきます。イエスの魅力にとらえられ、イエスに不思議な権威がそなわっていることを知り、まことの自由と

は何であるかに目覚めて行きます。そしてさらに、「アッバ、父よ」（マタイニ・二五～二七、マルコー一四・三六）と祈るイエスの秘密にふれて驚き、またそのイエスがわれわれのために十字架上の死を甘受し、そのとき神は沈黙を守っていたことも知るにいたるのです。

ひとことと言えば、イエスを通して見出される神は逃避の的としての神ではありません。また私たちが投企するような神でもないし、私たちに人間の条件と、その苦しみからの逃避の場を保証するような神でもないのです。十字架上の神の沈黙に続いて、復活したイエスにおいて、まことの神が啓示されます。その神はけっして神話に出るような神でもなく、また心理学で言う極楽復帰願望や胎内復帰願望の対象でもありません。現実逃避の神だのみではありません。イエスを通して現われ、イエスのように、この世と人びとを大切にする神であり、希望を与える神なのです。この希望はまず地上で人のためにつくして行くための原動力となります。そして、最終的にこの希望には根拠があるという大きなはげますが、われわれに与えられるのです。なぜかと言えば、イエスの死と復活において表われた神の力がわれわれを支え、われわれも永遠に神のうちに生きるという約束を保証するからです。

救いの意味

まことの人、まことの神であるキリストは、われわれの救い主であると信仰者は言います。その救いとはどういうものでしょうか。それを知るために、まずここでは、救い主としてのキリスト、つまり、人間を罪から解き放ち、神の生命にあずからせるイエス・キリストがわれわれにとっていかなる意義をもつかを考えてみましょう。

われわれのために

ヨハネの第一の手紙には、簡潔でしかも内容の充実した言葉があります。それはキリストの生と死の深い意味を述べて、こう言っています。「わたしたちが神を愛したのではなく、神が（先に）わたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある」（四・一〇）。この「あがない」（ラテン語でレデンプチオ）とか「つぐない」（ラテン語でエクスピアチオ）という言葉は、「なだめの供え物」という、誤解を招くおそれのある不的確な言葉に訳されることがありました。「つぐない」という言葉に置きかえてもまだ語弊がないとは言えないけれども、他に適訳がなければ、一応、これを使うことにしましょう。ただ初期のキリスト教において、この言葉がどのように理解されていたかを説明する必要があります。

ヨハネの右の言葉は、初代の信仰者たちの間では、キリストの生死が「捧げもの」として理解されていたことを示します。その捧げものによって、愛が利己心に完全に勝利したことを意味します。しかも、その捧げものは、「われわれのために」捧げられたと言います。初代の信仰者は、イエスの生死のこの深い意味をどのように理解したのでしょうか。

イエスの復活を通してイエスの生涯を見ると、それはもはや、理解されずに死んで行った敗北した預言者の一生とは思われなくなります。イエスの敗北は勝利であり、その死は生です。イエスは人間として生き、苦しみと死を引き受け、自分の命を愛の心

からの捧げものとして与えたのですが、それはすべてわれわれ人間のためでした。イエスの生と死によって救いはもたらされたのです。イエスの自己献身は神に受け入れられたのですが、われわれもまた、キリストによって、キリストとともに、キリストのうちに、神に受け入れられます。

あがないとは買い戻しでなく和解

旧約聖書に親しんでいた初代のキリスト者は、第二イザヤ（たとえば、53章）を改めて解釈し、「主のしもべ」について言われていることをイエスに適用しました。そして、イエスの受難を救いをもたらすものであると読みとったのです。「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」（マタイ二〇・二八）というイエスの言葉で予告される死は、「あがない」（レデンプチオ）の意味を含んでいます。最後の晩餐でのイエスの言葉、「これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である」（マルコ一四・二四）には、この意味がもっとはっきり表わされています。これは、神とイスラエルの民との契約のしるしとして流された旧約の犠牲の血（出エジプト24,8）、またあがないの例祭に捧げものとして流された血を指しています。しかし、「あがない」とか「血」という言葉の意味は誤解されやすいので、この点をもう少し明らかにしましょう。

ラテン語の「レデンプチオ」とギリシア語の「アポリュトロシス」は、その語源からして、「買い戻し」というイメージを思い起こさせるかもしれません。戦争終結後、捕虜を賠償金と引き替えに返還する（買い戻す）のもその一例です。しかし、「あがない」という言葉の背景にあるのは、ギリシア・ラテン的であるよりも、ヘブライ的な考え方です。ヘブライ語では、この言葉に含まれるいろいろな意味のうち、特に「解き放つ」というニュアンスが大切です。あがないは、買い戻しの支払いではなく、解き放つことであり、罪を滅ぼし、人を神と和解させることです。

ギリシア・ローマの影響を受けた者の中には、あがないを「買い戻し」という狭い意味に解釈する者も多かったです。中には「キ

リストは自分の血で支払って、悪魔からわれわれを買い戻した」などと、冒とくとも言える意見をはく者さえ現われてきました。こんな考えはキリスト教に反するばかりでなく、恐ろしいあやまちです。またこれほど誇張はしないが、「キリストの血が神の怒りをなだめた」と説明する人もいました。この言い方も適切とは一言いがたく、誤解を招きます。要するに、これらの著者たちは、「あがない」という語のギリシア・ローマ的語源にとらわれていたと言えましょうか。

罪を滅ぼし、人を神と和解させ、罪から解き放つことであるあがないは、「罪を取り除くためのささげもの」（ローマ書 3, 25）と書かれています。そこで「あがない」の真意を説明する必要があります。

罪が取り除かれる場

「つぐない」（エクスピアチオ）という言葉は、罰と結びついています。今日でも、刑務所の苦痛や臨終の苦悶によって罪がつぐなわれるといわれる場合がありますが、それは、苦痛や苦悩こそつぐないにとってもっとも重要だ、と考えられてしまうからでしょう。その根底にあるのは、「報復を要求する正義」の考えであり、こうした正義の発する怒りをなだめなければならぬ、とする見解です。このような考え方は、時にはキリスト教的と言われたりするのですが、実は、キリスト教のつぐない観念とはほど遠いです。しかし残念ながら、中世的な慣習やものの考え方、特に北欧の考え方は、説教者や著述家に好ましくない影響を及ぼしました。そして、「キリストの受難は神の怒りをなだめる罰である」とか、「苦痛や死は罰である」とか、さらに、「神は罪人に無限のつぐないを要求しているが、それを支払えるのはキリストの血のみである」といったまったく誤った考えが強調されるようになったのです。このような歪曲された考えは、今日のわれわれから見ると理解しにくいですが、キリストの十字架像のさまざまな表現にはその影響が残っています。

最近の聖書解釈学の諸研究によって、新約聖書神学におけるあがないの意味が、前より正しく、深く理解されるようになりました。ヨハネ（1ヨハネヨハネニ・二、四・一〇）やパウロ（ローマご一・二西-二五）が、神はキリストを罪に対するあがない（罪を取り除くための捧げもの）として世に遣わされたと述べる時、その背景になっているのは、ユダヤ教の年ごとの祭儀であり、その言葉には「罪から解き放つ」という意味があります。「罪を取り除くための捧げもの」は、「罪が取り除かれる場」と言えば、もっと正確です。これはエルサレムの神殿の契約の箱を覆う幕を暗示します。あがないの例祭で、大祭司は供え物の血をこの幕に注ぎます。ところで、この血のあがないにはどんな意味があるのでしょうか。

これを正しく理解するには、リョネーの研究で明らかにされたように、次の点を念頭に置かなければなりません。ヘブライ語動詞「キップル」は、神を直接自的語とすることはなく、「怒りを

なだめる」という意味もありません。また「罰を加える」、「正義の怒りを和らげるために苦しみを受ける」という意味もありません。その真の意味は「消し去る」です。そしてこの動詞の主語は多くの場合神であり、直接目的語は罪です。この動詞が、ある者の罪を「消すように」と神に願うユダヤ教典に使用されている箇所もあります。しかし、旧約聖書では、神の怒りと関連して用いられることは一度もなく、むしろ、罪ゆえに神から離れた人間が神に立ち返るという考えを表わす言葉として使われています。要するに、罪のつぐないは罰ではなく、浄化であり、和解です。

したがって、「キリストがわれわれの罪をあがない、キリストの生と死はあがないとしての価値をもつ」というのは、キリストの死が決して神の怒りをなだめる罰であるという意味ではなく、キリストの死こそ愛による自己献身であり、われわれを罪から解き放ち、神と和解させる、という意味です。ここでいう和解とは、神をなだめるということではなく、神から遠ざかっている者を神に立ち返らせて、新たにすることです。神は怒ることなく、罰を求めることもないのです。放蕩息子のたとえ話の父親のように、神は子の帰りを待ちわびています。

要約すれば、「キリストは神の怒りをなだめることによって、われわれをあがなう」と言うよりも、「キリストは罪を取り除くことによって、われわれを自由にする」と言ったほうがよいということです。われわれを「罪から解放する」キリストは、われわれのために「罪を取り除く捧げもの」「罪が取り除かれる場」となりました。そこで罪を取り除くキリストの献身について後に考えてみることにしますが、今ここでこの大切なポイントを手短かにまとめておきましょう。

* * *

ひとことで言えば、救いとは解放のことです。イエスの死と復活という出来事によって人類に解放がもたらされました。このことは「あがない」という表現で表わされてきましたが、この言葉には語弊があります。つまり、この言葉を聞いて商売の取引や裁判のイメージを思い浮かべがちですが、あがないの正しい意味は解

放です。「わたしたちの罪科のために死に渡され、死んだ」（1コリント一五・三ご一、ローマ四・二五）というのは、イエスの死こそわれわれに解放をもたらすということです。

イエスはわれわれをエゴイズムと罪と死から解放します。われわれからわれわれを解放します。われわれが作った偶像の神や、投影や、逃避としての神からわれわれを解放し、まことの父なる神と和解させ、父のもとに立ち帰らせます。あがないとは人と人とのあいだ、人と神とのあいだに行なわれる和解です（エペソ二ニ・一四～一一六、ガラテヤ三・二八）。

イエスがわれわれを解放して罪をゆるしたように、われわれもまた人の罪をゆるさなくてはならないのです。しかし、罪をゆるすというのは、罪を犯した人やその罪に対して目をふさぐ甘い態度を取るのではないし、単に罪を忘れることでもないのです。私たちが罪をゆるすというのは、次のようなこととなります。つまり、人がわれわれに悪いことをした時、その人は他者に罪を犯したというより、その人自身が自分自身に対して罪を犯したことになるのであり、その人がそのことに気づくとともに、その人がエゴイズムから解放されるようにと私たちが望むということです。これは私たちにとってたいへんむずかしいことではありますが、もし少しでもこのようなゆるしができるようになれば、それは神の恵みによるものと言えましょう。そのような恵みはかならずわれわれに与えられているものです。十字架上で、彼らをゆるしたまえと願ったイエスは、信頼に値しないわれわれを信頼し、私たちが自分自身から解放するゆるしを望んだのです。要するに、悪がいくら支配していても、最終的には善が勝つという希望をもって、はじめてゆるしが可能です。ゆるすとは、憎しみにかわり、人を解放する別なかわり方を設定することです。イエスの死によって、こうした根本的な意味でのゆるしがわれわれに与えられるというのが、救いの意味なのです。キリストのおられるところに解放があります（1コリントゴ—コリント三・一七）。

いのちを捧げるとは

もうすこし「捧げもの者」と「血」の意味に似ついて考え、よくある誤解をなくすようにしましょう。イエスがいのちを捧げたということの意味を考えましょう。特に、誤解されやすい点、たとえば、血を流すとはどういう意味か、罪のためのあがないとはどういうことか、などについて考えてみましょう。

まず、「いのちを捧げる」という言葉を聞くと、いろいろな古代宗教で行なわれた「犠牲」や「いけにえ」のことが浮かんできます。中でも罪のつぐないのための捧げもののことを連想します。しかし、そのような考えで旧約を解釈してよいかどうか、疑問です。

犠牲は多くの宗教に見られる礼拝形態の一つであり、それに二つの面があります。一つは外的表現（動物をほふって供えるなど）であり、他は内的態度（犠牲を捧げる者の心情）です。成熟した宗教心にとっては、外的態度より、心のもち方のほうが大切であるのは言うまでもありません。古代イスラエルでは、他の古代文化と同様に、象徴的表現として、動物をいけにえにすることがありました。礼拝の犠牲として動物をほふる時、神の絶対的支配が象徴的に表わされました。成熟した宗教心にとって、動物という目に見える犠牲以上に尊いのは、人の内心の捧げものであり、自我を脱し、神に自分を委ねる態度です。しかし、このような犠牲で獣を捧げることによる神の絶対的力の表示という象徴は理解されやすいので、罪のつぐないのために犠牲をささげるということは、神をなだめるために生き物をほふることだと考えられがちです。宗教史にはこうした考え方の例がいくらかでも見られます。

ところが、イスラエルにおけるつぐないの犠牲は、以上のべたようないけにえとは異なる意味をもっていました。イスラエルにもつぐないの犠牲はありましたが、その場合の「血を流す」ということの意味は、決して「神様をなだめる」ためではなかったのです。つぐないの例祭とかその他の祭日のいけにえについては、イスラエル人が血のことをどう考えていたかを知る必要があります。

イスラエル人にとって血液は生命の原理でした。したがって、動物の肉を食べる時も、その血を事前にすっかり抜いてしまうまでは肉に手をつけることを禁じられていました。

祭壇に注がれるいけにえの血は、まわりに集う人びとのいのちを象徴していました。人びとは自分の罪ゆえに神との一致が破れたことを知り、心を改めて神を求めます。祭壇に注がれる血は、人びとが神のもとに立ち返ったという内的態度と、それを受けいれる神の応答とを表わしています。このようにいけにえを捧げることは、人びとがその罪によって神から離反したことにより失われた神との一致を回復する和解の祭儀であり、人びとを神に生かされる生活に復帰させ、罪ゆえに破壊された神との愛の関係を結びなおす祭儀です。ここで神は神に立ち返る人びとを受け入れ、彼らに新たな生命を与え、彼らの罪を消し去り、神と一致させるのです。

新契約の捧げもの

このことを背景にして見ると、イエスは十字架上で血を流すことによって、それまでの大祭司にまさる犠牲を捧げた、とヘブル書が語っている理由が分かります。旧約の律法による犠牲は不完全なものにすぎません。人間にとって唯一の真の大祭司であるキリストは、「一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされ」（ヘブル九・一二）、唯一の永遠の犠牲になりました。それゆえ、聖所にはいった「キリストの血」によって、人間は生き返り、神に結びつけられ、「死んだわざを取り除き、生ける神に仕える者」（同九・一四）となります。こうして最後の晩餐でイエスが与えた契約が実現されるのです。

以上の考えは、ヘブル書一～一〇二一〇章で展開されていますが、その結びの個所（二〇・七）で著者は、キリストの献身を有意義なものとするその内的態度に注目しています。そして、詩篇四〇40篇をもって、キリストの生涯と死の深い意味を示唆します。「神よ、御旨を行うためにまいりました」（ヘブル一〇・七）。これこそ、愛のしるしとしての従順の態度です（同五・八、ピリピ二・八）。

罪とは愛を否定することです。全人類に責任を負う頭・キリストは、全人類の名において、父なる神に愛を捧げました。それは、過去・現在・未来の全人類の罪とエゴイズムを消し去る価値のある愛でした。キリストは、神に対して人間の側からする肯定（イエスイエス）であり、神に対して人間の側からする拒絶（ノー）である罪を完全に打ち破ったのです。同時に、神は人類とふたたび一致するために、キリストを人類に対する神白身の「しかり」の答えとしたのです。

キリストの内的献身は、生命を与えるという外的献身をも伴います。一般に、苦痛と死は人生の大きな部分を占めているとはいえ、罪の罰ではありません。キリストは、真の人間としての経験を受け入れ、罪を除いては、人々と同じようになりました。それゆえ、イエスは人間の名において、愛のしるしである従順を神に誓うことができました。悲惨・苦痛・死という人生の最も不可解な体験を、神の怒りをなだめる罰としてではなく、人間としての

連帯性をもって受諾したのです（ヘブル二ニ・一七～一八、四・一五～一六、ガラテヤ二ニ・二〇、Iヨハネヨハネ三ご一・一六）。

われわれのためにいのちを捧げたイエスがわれわれを救い、われわれの罪をつぐなうということはどういうことなのでしょう。キリストの献身のもつ深い意味とは、愛の自己献身によって、人々を父なる神のもとに立ち戻らせ、神と一致させることにあります。罪を犯す時、人は愛を忘れて神から離れるから、罪をつぐなうとは、根本的に愛に復帰することです。しかし、悪をのがれられない人間は、自力で愛に立ち返ることはできません。キリストのみにそれを実現させる力があります。人類に救いをもたらすキリストの愛こそ 1) われわれにとって恵みの泉であり、2) あらゆる人間の利己心のつぐないとなっています。

キリストが死に至るまで苦悩に満ちた人の道を歩んだことは、救いの本質的要素であるにしても、十字架上で死ななければならなかった理由があるのでしょうか。ほかの死に方がありえたのではないのでしょうか。キリストの救いの業は、人間にはありえないほどの愛をもって、人間を代表して自らを献身したことにあるのではないのでしょうか。

いずれにせよ、人間理性には理解しえず、究めつくせないからといって、キリストの十字架の死が無価値であるとは言えないのです。悪という謎も、神がその悪が起こるのを許す謎も理解しがたいように、キリストの十字架の死は理性にはつまずきとなるでしょう。しかし他方、十字架という謎においてこそ、神が何者であり、人間が何者であるか、言いかえれば、神の愛と人間の罪が明らかにされています。

人間はすべて、全人類においても、ひとりひとりの生涯においても、自己中心・不正・憎悪・傲慢などに満ちています。キリストを十字架につけた人々より自分のほうが善人だとか、自分ならキリストを殺すようなことはなかった、と誇りうる者はいないでしょう。われわれは十字架のうちに、人類史を通じて他に類似を見ない愛に出会います。そして真の神、真の人として、われわれを代表するキリストが十字架にかけられている姿を仰いで、はじめて人間を楽観的に見ることができようになります。十字架上

の人間イエスを仰ぎみる時はじめて、人間には軽蔑すべきものよりも、称賛に値するものがあると言います。愛するようにと呼びかけられながらも、利己心によって罪におちいりやすい人間は、キリストの愛によって立ち直り、神に帰って行きます。これが「あがない・救い」という一言葉一の真の意味です。

以上、キリストが自分のいのちを捧げることによって、われわれ人間を救ったということの意味を探ってみました。これを理解するためには、キリストと全人類との連帯を理解しなければなりません。

キリストと人類の本質的結合を認めなければ、キリストの救いをもたらす献身をも理解できません。パウロはこれをよく悟っていたので、キリストのうちに一体となるという考えは、彼の神学の中心となっています（ローマ六・四、ガラテヤ二ニ・一九、エペソ二ニ・六、2n コリント五・一九、エペソ二ニ・一六一ハ）。

全人類はこうして、キリストにおいて神に立ち返るようになります。しかし、ひとりひとりが自分の生活でキリストの愛を自分のものとし、自我を脱して行く時、はじめてイエスの神に対する「然り」は、その人個人にも実現し、あがないが実現されるのです。

二つの注

古来、神学者は、キリストの愛のもつ二つの面、1) 人間にとって恵みの泉であるということ、2) 人間の利己心のつぐないであるということについて論じてきましたが、トリエント教会会議は、キリストがわれわれにもたらした救いを、「功績」と「贖罪」という二つの難解な神学用語で表現してしまいました。

キリストの「功績」という言葉は、前述した愛の行ないのために人間に必要な恵みはキリストの功績によって与えられる、という意味です。「贖罪」という言葉は、人間の利己心や罪をキリストの愛が十分に償っていることを表わしています。

伝統的方法によって「あがない」を論じれば、「功績」と「贖罪」の二語は胃頭から出てくるでしょう。しかし、今回は、ここで、付録みたいな形だけで、この二語にふれることにしました。さきに述べた説明を念頭に置かなければ、「功績」という語は、あがないを法律的にのみ理解させ、「贖罪」という語も、「神の怒りをなだめる」というゆがめられた意味にとられる恐れがあるからです。

「贖罪」という言葉は、正しく理解して使わなければなりません。つまり、神は罪深い人間をいつくしみ深く、温かく迎えはするのですが、人間の至らなさをただ単に愛のために大目に見るにとどまるわけではないのです。神が望んだのは、人類史にキリストの愛が広がることでした。愛の心からの捧げものは、歴史にはびこった利己心を根こそぎにするのです。

キリスト論の形成と古代の論争

初代教会以来キリスト者たちは、まことの神まことの人であるキリストの奥義について、人間の言葉がもつ限界にいどみながら、もっとも適切な方法で表現しようと試みてきた。今ここで、この奥義が表現されてきたさまざまな方法をふりかえってみましょう。

四世紀から五世紀にかけて、中東キリスト教の二つの神学派は、キリストの奥義について論争を行ないました。アレキサンドリア

学派は何よりもキリストの神性を強調しましたが、これはキリストの人間性を見のがすことになりかねなかったのです。一方、アンティオケ学派はキリストの人間性を強調し、その結果キリストの神性を十分に重んじない恐れがありました。

両派の主張はこのように異なっていながらも、両極端に陥る前に、たがいの主張を補足し合っていたと言えます。ところが、アンティオケ学派のネストリウスは、マリアを「神の母」と呼ぶべきではないという主張を行なったのです。彼がこのような主張をしたのは、マリアがキリストの神性を生み出したということを認めるような表現を避けるためでした。しかし、一般の敬虔なキリスト者たちは、古くからマリアを「神の母」の名で呼ぶことに愛着をもっており、彼らがネストリウスに反対の声をあげたのも不思議ではないでしょう。この人たちは、マリアを「神の母」の名で呼ぶことを否定すれば、それはキリストの神性の否定につながるのではないかと恐れたのです。

アレキサンドリア学派は、キリストが神であることを擁護しようとしてしました。エペソ教会会議（四二二年三一年）はネストリウスを異端として排斥しました。その後二十年を経て、教会はあらためて、キリストに対する信仰を適確に表現しなおす必要を感じました。というのは、ネストリウスの異端的な考え方とは逆に、当時は勝利を収めたアレキサンドリア学派の熱狂ぶりも次第に度が昂じて、過度な主張となってきたからでした。同派の一都の者は、キリストの人間としての本性については語るべきではないと主張するようになりました。そこでカルケドン教会会議（四五一年）では、キリストのうちにただ一つの神的ペルソナと二つの本性、すなわち神性と人性があるという教義を決定したのです。当時から規範として守られてきたこの言葉づかいは、今日にいたるまで受けつがれています。しかし当然のことながら、当時と同じく今日においても、アンティオケ学派の主張、あるいはアレキサンドリア学派の考え方を大げさに述べたてる傾向は依然としてなくなってはいないのです。

そのうえ今日では、ペルソナという概念について新たな問題が出てきました。それは神学でいうペルソナという言葉が、心理学で使うペルソナと混同されることだからです。カルケドン教会会

議の決定内容が誤解され、今日心理学で用いられるパーソナリティ（人格）がキリストには認められないかのように思われる恐れがあります。しかし実際は、カルケドン教会会議におけるペルソナの意味は、そのように解釈してはならないでしょう。現代心理学でいわれるパーソナリティは、カルケドンの用語で言えば、「キリストの人間としての本性の働き」という内容に含まれるものなのです。ペルソナという言葉は、当時は心理学的な意味ではなく、もっぱら神学的な意味で用いられ、キリストの自己のユニークな統一を表わす言葉として用いられました。こういう事情ははなはだ抽象的なことのようにきこえるかもしれませんが。しかし大切なことは、これらの論争の背後に、キリストの神性をも人性をも否定することなく、穏当な方法で、キリストへの信仰を表わそうとした教会の配慮がうかがわれることでしょう。

キリストという一つのペルソナに神性と人性が同時に存在することをわかりやすくするために、ある神学者は「親木」と「接ぎ木」のイメージで言い表わそうとしたことがあります。これはたとえとしては不完全でもあり、筆者自身もこれをたとえとして使うことにはためらいがありますが、一応参考にしてみます。まず、じかに土に植えられた小枝が他の木に接ぎ木されて大きな木に成長して行く姿を想像しましょう。この小枝は最初、土中から直接に栄養分を摂取して成長します。つぎにこの小枝が他の木に接ぎ木されて大きくなる場合を考えましょう。この場合、接ぎ木された小枝は親木から養分をとって成長します。接ぎ木した小枝をもつ木のように、キリストにあっては一つのペルソナに神性と人性の二つの本性が備わっていると考えられます。接ぎ木された小枝（イメージとして人性を示す）には、それなりに必要なものが全部備わっているように、キリストの人性には、まことの人間として備わるべきものが何一つとして欠けていないのです。しかし、キリストの人性は、その神性から独立した形で存在するのではなく、キリストの唯一の神的ペルソナに接ぎ木された形で存在するのだと言われます。キリストには人間としての本性に特有な働きと同時に、神としての本性が示す独自の働きが認められます。しかし、だからと言ってキリストには二つのペルソナがあるということには決してなりません。唯一のペルソナに二つの本性、す

なわち神性と人性が同時に存在するのであるというのが、カルケドン教会会議から定着してきた表現です。

人間と神との一致

このようにキリストの奥義を説明しようと努力しても、おそらく言葉では説明しつくせないということを認めなければならないでしょう。（もともとそれは無理です。これまでの説明は、それをあえて説明しようという微力な試みにすぎないのです）。このような説明ではキリストの奥義はどうてい表わせるものではないのですが、一方ではそこに非常に大切なことが含まれていることに気づきます。つまり、神の子の受肉というのは、吉代中東によくあった擬人的神話ではないということが分かってきます。神が人性を引き受けることによって、すなわち、神が人となることによって、それを高めるというのがキリストの受肉の意味です。それゆえ、神の子の受肉というのは神の愛の現われです。このような神の愛は人間の救いとなります。

しかしそれは、ただ単に神が人間の罪をゆるすからというよりも、もっと深い意味をもっています。キリストがもたらす救いは罪のゆるしだけではありません。キリストによる救いは、まず何よりもキリストの存在そのものです。つまりキリスト自身が救いであり、キリストのペルソナにおいて人類全体が高められ、人間の尊さ、偉大さが示されたのです。われわれはキリストに一致することによって、その神性にもあずかるように招かれています。感謝の祭儀において、司祭がぶどう酒に数滴の水を注ぐ時の言葉がこれを示しています。「この水とぶどう酒の神秘によって、わたしたちが人となられた方の神性にあずかることができますように」。

キリストにおける神性と人性ということについては、さきに述べましたが、ここにはイエスの意識というむずかしい問題が含まれています。人間としてのキリストが「わたし」と言う時、それは人性を指すのでしょうか、それとも神性を指すのでしょうか。人間としてのイエスの意識は、神としての自我につながっているのでしょうか。言いかえれば、イエスは神としての自己意識をもったのでしょうか。

神学者たちは、長年のあいだ、この間いとこれに類する間いに取り組んできましたが、ここで新しい理論をつけ加えたり、新しい説明をするかわりに、どのような場合でも心にとめておかねばならない二つの基本的な考え方を示すにとどめたいです。 1) キリストの受難、ゲッセマネの園での苦悩、孤独、苦しみの体験、「なぜ私を見捨てられるのですか」という十字架上の苦間は、決してイエスの「芝居」ではなかったのです。真の人間として、これらすべてを体験し、苦しみのさかずきを飲みほして死を迎えたのです。 2) それとともに、イエスの自我の奥底、神的なペルソナにつながるところに、いつも父なる神に対する絶対的な信頼があったに違いありません。それは神のひとり子として、父なる神のみ手のうちにあるという信頼です。

以上の二つの面が同時に存在することがどうして可能であったのでしょうか。人間としての経験しかないわれわれにとって、これは理解できないことです。イエスの意識のうちにこの二つの面が共存したという奥義が、結局、まことの神、まことの人としてのイエスのペルソナの奥義にほかならないのです。その意識がどのようなものであったか、神秘家の場合の意識のあり方を探ることから何かヒントがつかめるかもしれません。たとえば聖テレジアの「靈魂の城」によると、はじめて神の存在が魂の内を照らした時、神と一致したとの体験がきわめて強くなり、日常生活で普通感じている意識が影をひそめたかのように思われ、その時突然無我の境地が開かれると言います。しかし、このような神と一致した状態がたびたび起きて習慣になると平常の生の、普通の意識と共存することができると言っています。同書「第七のすまい」の段階で彼女が体験したいわゆる靈的婚姻においては、魂は「普通の意識」を保ちながらも、一種の連続した「無我の境地」と共存することができると言っています。つまり、常に神と一致しているという喜びに満たされながらも、平常の意識をもち続けることもできるということです。

イエスの意識の奥義は（たとえ理解できないにしても）、それをどのように表現すればよいか、聖テレジアのこの話が何かヒントとなるかもしれません。キリストにおいては、神と一致したという意識はどの神秘家よりもはるかに強かったでしょう。なぜな

らキリストは、自分自身神の子であるという自覚を秘めていたからです。

これこそ救い

これまで述べたところを要約すれば、人間イエスにおいては、人類の一人でありながら神の子であるという関係が頂点に達しました。それは人類の最高の使命であり、新約聖書の愛の教えの根本です。イエスという一人の人間が、神と同じペルソナであることを望んだ父なる神は、そのひとり子を世に送るほどに人間を愛しました。この世に送られたイエスは、われわれと同じ人間の意識をもちながら、同時に自分は神の子であるという自覚がありました。こうして人類史上初めてにして、かつ一度だけ、真に人間である魂が、考えられないほどの愛を行なうことができました。

人間イエスはわれわれの悲惨、苦悶を引き受けて、苦痛、孤独、死を経験し、人間として神に向かって「父よ」と呼びかけ、ほかの人間にはできない愛を捧げました。なぜなら人間イエスは真に人間の心をもって愛したのですが、同時にイエス自身が真に神でもあるからです。それゆえ、キリストの愛は神とわれわれの仲をとりなし、われわれの罪を消してくださるのです。それゆえ、われわれに救いがもたらすようになります。しかしこの救いとは、われわれの罪をゆるすということだけにかぎらないのです。それは神の子キリストを通して、われわれ自身もまた神の子となるよう呼びかけられていることを意味します。われわれは、キリストの愛を自分のものとし、すべての兄弟姉妹にそれを広めるよう呼びかけられているのです。これがキリストによってわれわれにもたらされる救いです。これこそ、救い、あがない、永遠のいのちという言葉のもつ豊かな意味であるといえましょう。

人間イエスがキリストであり、神の子であると言う時、イエスの奥義に関する大切な二面が言い表わされています。つまり、まことの人でありながら、まことの神であるという二つの側面のことです。この二面性の奥義およびイエスと神との関係という奥義は、イエスの生涯を通して徐々に明らかになってきます。

パウロのキリスト論とヨハネヨハネのキリスト論を比べるのは興味深いことですが、パウロにとっても、ヨハネヨハネにとっても、キリスト教とはつまるところ、キリストそのものを受け入れることが何よりも大切な基本となります。キリストを信じることは、神が愛であり、その愛のしるしであるひとり子をこの世に遣わされたことを信じることです。われわれがキリストに生かされて永遠に生きるように、神の遣わされたキリストが神の愛のしるしなのです。

キリストは神の愛のしるしであり、キリストを信じることは、神のいつくしみに満ちたまなざしがわれわれに注がれており、神によって救われると信じることです。神はわれわれを罪や死から救うだけでなく、われわれをエゴイズムから救い、真に愛する力を与えます。ヨハネは、若者らしい友情を示しながら落ち着いた調子でイエスの愛に目ざめ、パウロは突然呼ばれて、ゆるしを乞う者として、イエスの愛に目ざめました。パウロが新しい生を生きることができたのは、イエスの愛によるものであり、このイエスの愛は神の愛です。

このイエスの愛は同時に、神の愛に対して人間も真の愛をもって応答できることを示します。なぜなら、イエスはまことの人間だからです。救いの井戸から水を汲む（イザヤ書一二・三）ように、われわれもキリストから新しい愛を汲んで、その愛を自分のものとすることができますでしょう。

キリスト者であることは、イエス・キリストの愛を信じることです。「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。……わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである」（ガラテア二二・二〇）。「わたしたちは、…愛を信じている」（1ヨハネヨハネ、四・一六）。このキリストの愛に対して、われわれも愛をもって答える決心をするように呼びかけられています。そしてわれわれは、それに答えることができます。なぜなら、キリストのうちに、キリストによって、キリストとともに、神がわれわれに人間らしく生きる可能性を開いたからです。言いかえれば、われわれは、キリストによって神の愛を受け入れ、それに答える時、愛する存在となります。

キリストに生きる

これから「恵み」の意味を考えなおしてみたいと思いますが永遠の命の意味ウイ緒探ることから始めましょう。

上述したように、キリストがこの世に送られたのは、われわれの「罪を消し去る」ためだけではなく、われわれが「キリストによって生きる」ためでもありました。この新しい生はキリストの生に預かることです。「キリストに生きる」というのは、神学で恩恵と呼ばれます。恩恵はもともと贈り物を意味します。人間に与えられた一番大切な贈り物は、神の子が人となったことであり、われわれはキリストと一致することにより、神にいのちにあずかるよう、呼びかけられています。ヨハネ福音書は言います。「彼を受け入れた者には、彼は神の子となる力を与えた」（ヨハネ一ヨハネ一・一二）。パウロはキリストが神の子であるあり方と、われわれが神の子であるあり方を区別するために、われわれについて「養子」という言葉を用いています。しかしパウロは、これを法律でいう「養子」という意味に理解したのではないのです。そういう外面的なものではなく、キリストの霊によってわれわれのうちに生まれる新しい生を、「養子」という言葉で表わしました。

ある神学者は、罪のゆるしをまったく外面的にとらえてしまいます。つまり、あたかも神はイエス・キリストの功績というベールで、われわれのいたらなさをおおい、そのおかげでわれわれは罪からまぬがれるにすぎないかのように考えたのです。しかし、恩恵の真に意味するのは、そのような外面的糊塗ではなく、人間が真底から内面的変革をとげることがを意味するのです。つまり、キリスト者に生まれかわること、キリストのうちに新しく生まれかわることです。

パウロは、ガラテア人への手紙のなかで次のように言っています。「神は私たちが養子となることを受け入れることができるように、み子をつかわされました。あなたがたが神の子である〔証拠〕は、あなたたちの心のなかで『アッバ、父よ』と叫ぶみ子の霊をつかわされたことである」（ガラテア 四・四-七）。初期キリスト教のある著者は次のようにしるしている。「人が神の子

となることができるように、神のひとり子は人になられた」。人間イエス・キリストは、母マリアの胎にいる時から神のみ子であり、それはイエスの兄弟姉妹であるすべての人間も、どのようにせよ、いずれは神の子となるためです。神はわれわれの罪をゆるすだけでなく、われわれをゆるすとともに、われわれに神の子の資格を得させるのです。それだけでなく、われわれ人間が神の子となることは、神の子が人となることによって可能となります。それゆえ、われわれは神の子であり、そこにわれわれの救いがあるのです（ローマ八・一四―一七参照）。

われわれを生まれ変わらせ、神の子とするこのような内的変化を、神学用語では「聖化の恩恵」と呼ばれたことがあります。これはわれわれを内的に変え、神を理解し、愛し、神と一致するわれわれの能力を高めるキリストの霊が、われわれの心に現存することです。パウロはわれわれのうちにあるキリストの霊について、これを封印のイメージにたとえて語っています（エペソーエペソー・一三）。キリストの霊の形づけが、封印のためのやわらかいろうの形づけにたとえられているのですが、これが「聖化の恩恵」と呼ばれてきたものにあたります。それは単に外面的な変化ではなく、われわれを高め、新しい生、神聖な生、キリストによる神と一致した生への可能性をわれわれに与え、われわれを真に内面的に変えるものです。

恩恵をただ、人が神に似せて造られた恵みと見るよりも、人間がキリストによって神に立ち戻り、新しいいのちを得ることととらえる時、恩恵をもっと豊かなものとして受け取ることとなります。

アリストテレス的な考え方に影響を受けたラテン神学では、長年のあいだ、恩恵とは人が神に似ているという「特質」もしくは「習性」とみなしてきました。このような恩恵の理解の仕方を表わすものとして、恩恵とは洗礼の儀式の一つに象徴的に示される白い衣のようなものであると言われてきました。このイメージは確かに美しくはありますが、反面、物足りない感をまぬがれないのです。こういうとらえ方は、恩恵のもつ生き生きとした息吹きを伝えておらず、救いの否定的な面、罪のゆるしの面だけを見る恐れもあります。このイメージによれば、恩恵の唯一の働きは、

罪という黒いけがれたものを白い衣でおおいかくすことであるかのような印象を与えるでしょう。

したがって、前に引用した封印のイメージのほうが、恩恵の深い意味を表わし、より適切なたとえと言えましょう。ギリシアの教父たちは、パウロに従って、特にこのイメージをよく用いました。神の恩恵を言葉で表わす時、アリストテレスの言う「特質」よりも、「神との一致」と言ったほうが、その意味をよくとらえることができます。一致とはただ似ているだけではないのです。「神の本性に預かる」と述べたペトロの手紙の表現を思い出しましょう（2ペトロ 1,4）。われわれは、キリストと一致することにより、そしてキリストを通して神の子となります。アウグスティヌスは、キリストの奥義を考える時、パウロに従い、全体的なキリストについて述べています。すなわち、われわれは皆、ただ一つのからだの肢体であり、その頭はキリストだということです。

キリストのからだ

前述したようにキリストの奥義を理解する時、救いや信仰についての個人主義的な考え方は意味がないことが分かってきます。人はひとりきりでいるのではなく、社会の中に生きているように、神の計画においても、救いの個人的な面は、共同体的な面と分かち難く結びつくものです。

ここでヨハネ福音書に現われるぶどうの木のイメージを思い起こしましょう。「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりぞき、実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいになさるのである。あなたがたは、わたしが語った言葉によって既にきよくされている。わたしにつながっていないさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながってしよう。枝がぶどうの木につながっていないければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていないければ実を結ぶことができない。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつなが

っており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。人がわたしにつながっていないならば、枝のように外に投げすてられて枯れる。人々はそれをかき集め、火に投げ入れて、焼いてしまうのである。あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。あなたがたが実を豊かに結び、そしてわたしの弟子となるならば、それによって、わたしの父は栄光をお受けになるであろう。父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい」（ヨハネ一ヨハネ五・二九）。

キリスト者は一つのからだの肢体であり、その中心はそれぞれの肢体にいのちを伝えるイエイエス・キリストです。キリストのいのちにあずかることは、われわれが恩恵と呼ぶものです。キリストのいのちにあずかることは、われわれが一つの体の肢体となることです。この一致の頂点と中心は、主の晩餐を記念するエウカリスティア、すなわち、感謝の祭儀です。

ここではパウロの述べた言葉の中で重要な個所を思い起こしましょう。

「からだ一つであっても肢体は多くあり、また、からだのすべての肢体が多くあっても、からだは一つであるように、キリストの場合も同様である。なぜなら、わたしたちは皆、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自齒人自由人も、一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受け、そして皆一つ御霊を飲んだからです。実際、からだは一つの肢体だけではなく、多くのものからできている。……もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ。あなたがたはキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体である」（I コリント一・一二-一四、二六-二七）。

「わたしたちが祝福する祝福の杯、それはキリストの血にあずかることではないか。わたしたちがさくパン、それはキリストのからだにあずかることではないか。パンが一つであるから、わたしたちは多くいても、一つのからだなのである。みんなの者が一

つのバンを共にいただくからである」(I コリント一〇・一六―一七)。

このテーマについてアウグスティヌスは次のように説明しています。

「キリストの体という言葉を目にして『アーメン』と答えます。そのアーメンがほんものとなるよう、キリストの体にふさわしい肢体となりなさい。肢体がなくて頭だけのキリストはなく、キリストは頭と体をそなえた全体的なキリストです。……われわれはキリスト者となっただけでなく、キリストとなったのです。……キリストが頭だとすると、われわれは肢体であり、全体的な人間とはキリストとわれわれが一つになったものです。神の言葉は人となりました。教会はその体と一体になって、そうしてはじめて、頭と体をもった全体的なキリストとなるのです……」。

キリストの霊がわれわれのうちにあるとパウロが言っているのを思い出すならば、パウロの言葉について加えられたアウグスティヌスの説明はもっと分かりやすいものとなるでしょう。聖霊はキリストの体である共同体の心であると言うことができます。キリストの頭とキリストの肢体、これらすべてが同じ霊によって力づけられる一つの統一体です。

世界の進化を人類発展のプロセスと見たティヤール・ド・シャルダン、パウロに基づき、理性をもって人間の歴史を見る時、それが神による救いの歴史に高められているのを見て取ったのです。そこには、最終的にキリストの全きからだがあると考えました。

神は、人間がその中で生きることができるように世界を造り、キリストの受肉を行なうために人間を造りました。このような考え方は、ギリシア系の教父たち、およびドゥンス・スコトゥスにもすでに認められるものですが、そのような創造の目的とするところは、キリストの受肉を目ざして、人間を実現することでした。パウロが言うように、「万物は……御子によって造られ、御子のために造られた」(コ官コロサイサイ一・一六)のであり、万物の創造と救いの歴史の最後に行きつくところは、「キリストがすべてであり、すべてのものの中にいます」(コロサイ三・二)という究極的な一致です。

パウロのこのような広い考え方に対して、受肉があたかも罪という事実に完全に依存しているかのような考え方が不幸にも一般に広まってきました。しかし前にも言ったように、キリストがわれわれにもたらす救いは、単なる罪のつぐない以上の何かです。救いというのは、ギリシアの教父や神学者が考えたように、全人類を価値あるものとしてたかめるキリストの存在そのものです。救いとは、キリストの霊によって力づけられ、キリストの唯一の体と一つになることによって、われわれも神の子としてそのいのちにあずかることです。それゆえ、キリストは「われわれのために」あり、受肉も「われわれのために」あるとすることができます。キリストは、われわれを罪から解き放つためにだけこの世に送られたわけではありません。キリストがわれわれを罪から救うためにだけ人となったと考えることは、受肉の真の意味をせばめてしまうものです。ヨハネが言うように、われわれがキリストによって生きることができるように、彼はこの世に遣わされたのです。

原罪

最後に、原罪についてはしばしば誤解がなされているのですが、これについても一言しておかなければならないでしょう。原罪については時々、罪によって引きおこされた悪を直す必要があったから、そのためにのみ、キリストがこの世にきたかのように言われます。このような見方は原罪の教義の大切なところを見のがしています。つまり、神が人類全体を救う意志があり、その全人類はキリストにおいて連帯するという肝心な点が忘れられてしまいます。

最初に罪についてあまりにも多くのことが語られ、歪んだ秩序を正すキリストについては、最後にごく簡単に触れられることが多いの神学書にみられる過ちです。しかし、キリスト教義についての正しい説明は、罪から始めるのではなく、キリストから始めるべきです。

ローマ書五章において、パウロが原罪について述べているところをよく理解するためには、次の点に注目しなければなりません。すなわち、パウロが強調するのはアダムの罪ではなく、救いが普

遍的なものであること、すべての人間がキリストにおいて一致することです。パウロにおける原罪についての見解は、キリストの奥義に関する彼の神学の一ページにすぎないのです。キリストの奥義については前述したので、今は次のように要約することができます。

救いの意味を考えるにあたって、先に述べたあがないの考え方を踏まえてみる時、それが単に罪を中心として考えるようなものでないことが理解されます。また、キリストの奥義とその奥義にわれわれが気づかぬことについて、前述した考え方に立てば、救いとはキリストからの贈り物というよりも、キリストの存在そのものが救いであることが理解されます。われわれの救いとは、「キリストに生きる」、「神のみ子においてわれわれも神の子となる」、「キリストの霊に生かされて、唯一のキリストの体を形造る」ことであると理解する時、「恩恵」や「教会」など、いわゆる「信仰入門書」の本の中で覚え、ただ習慣として繰り返す時には空虚に思える言葉も、われわれにとって新しく、深い意味をもつものとなります。

キリスト教的歴史観

これまでのべてきたことの総括として、ここでキリスト教的歴史観のまとめをこころみてみます。このような考察の中心となるべきテーマは、「キリストと人類の歴史」です。これまで行なってきたキリスト教の紹介の中で、この信仰の歴史的起源について見てきました。ひとこと言えば、それはナザレのイエスです。また、キリスト教の信仰者の集まりや教会がどのように始められたかをも見てきました。イエスによって導かれたこのグループは、祈る時には、父に対するように神に向かい、もっとも重要な神の奥義とイエスの大切な教えとは、まことの愛の実践であると信じました。そのような生き方を毎日の暮らしの中で実践しようとする信仰者の生き方や根本姿勢は、次のような信仰告白で表わすことができます。

「人間の根源的な力として人格的な普遍の愛を信じます。このような愛がありうることを信じます。なぜなら、われわれが神と

呼ぶ人格的な愛の奥義が人間の根源には生き続けているからです。われわれの父であるこの神は、われわれもイエスのように愛することができ、われわれの愛も、たとえ敗北とみえる死があるにせよ、最終的な完成にいたりうることをイエスにおいて示され、それをイエスのいのちと言葉によってわれわれに保証されました」。

イエスの生き方と態度の背後には、歴史を神の愛が示される「場」、その愛に対してわれわれが答える「場」と考えるキリスト教的歴史観があり、その啓示の頂点にイエスの奥義があります。イエスを中心とする救いの歴史としてのキリスト教的歴史観について少し述べてみましょう。

「御子をおつかわしになった。ここに愛がある」（Iヨハネヨハネ四・一〇）。新約聖書の中では一般に神について次のように示されています。「神を見た者はまだひとりもない。ただひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」（ヨハネ一・一八）。神とは愛であると言っています。神はみ子をこの世に送り、われわれの心にその霊をばらまきます。父なる神をあらわす存在であるイエスは、われわれが救いの歴史と呼んでいる神のあらわれの中心であり、頂点でもあります。これまでに見てきたように、イエスがわれわれにもたらす救いは単に罪のゆるしではなく、もっと大きなものです。それはわれわれが神のいのちにあずかることであり、われわれが神のひとり子であるイエス・キリストと一つのからだとなることによって、われわれも神の子となることです。まさにここからキリスト教的歴史観を発展させることができます。キリストの体である共同体について、前に述べたことを念頭に置いてキリスト教的歴史観を発展させて行きましょう。

イエスがこの世に送られたことによって、人類の歴史にはわれわれがパウロとともに「時が満ちている」と言うことができる決定的な時期がおとずれます。「時の満ちるに及んで、神は御子を女から生れさせ……おつかわしになった」（ガラテヤ四・四）。エペソ書の中ではキリストのからだを建てることが語られています。教会において、信仰によってキリストと一つになっている人びとによって形造られている全体的なキリストのからだが大きくなるよう協力するのは、人びとすべての仕事です。パウロは

さらに、もっと広い視野に立ち、人類はどの時代においても、すべてこの全体的なキリストのからだを建てるよう呼びかけられていると考えます。完全なキリストのからだを形造ることは、われわれが解放され、神の子らの光栄にあずかるのを希望することであるとさえ彼は言っています（ローマ八章）。

このようにキリスト教的歴史観は表わされます。イエスの生涯とイエスが集めた弟子たちの集まりを通して、神の計画が明らかにされています。この神の計画とは、愛によって人間のための世界を造ることであり、神の子とするために人間を造ることであり、さらに、ひとり子イエス・キリストを世界と人間の歴史の偉大な一致の頭とするために、この世に遣わすことです。「神は万物をキリストの足の下に従わせ、彼を万物の上にかしらとして教会に与えられました。この教会はキリストのからだであって、すべてのものを、すべてのもののうちに満たしているかたが、満ちみちているものに、ほかならない」（エペソ 1・21-22）。

この信仰に照らしてみる時、人類の歴史はすべてのもの、すべての人がキリストにおいて一つになろうとする道です。換言すれば、それはアウグスティヌスが言ったように、全体的なキリストを形造ろうとする道です。この救いの歴史の道は古くから準備されてきましたが、前にも述べたように、キリストが送られたことによって「時が満ち」、それは頂点に達するのです。今やキリストによって、われわれにも神の子としての永遠のいのちが与えられました。キリストの体はすでに建てられ、大きくなりつつあります。それは「キリストの日」に完成するでしょう。このキリストの日とは、一人一人の場合、その生涯の終りの日にあたり、人類にとっては歴史の終りの日にあたるのです。エペソ書の始めの部分は、この神学の言わんとするところをよく言い表わしています。その中でパウロは世界や歴史を神の視点から眺めようとする信仰の目で神の導きを考えています。「神は御旨の奥義を…わたしたちに示して下さったのである。それは、時の満ちるに及んで実現されるご計画にほかならない。それによって……ことごとく、キリストにあって一つに帰せしめようとされたのである」（エペソ 1・9-10）。それはキリストをすべてのものの頭となすことです。

こう考えれば、これらの言葉が前に述べたキリストの体や全体的なキリストとどうつながっているかがもっとよく理解されます。

十一世紀の聖アンセルムスの頃から、キリスト教放伝道者の話し方に残念ながら大きな影響を及ぼしてきた考え方があります。それによれば、キリストの受肉は人間に罪があるからこそと考えられていました。罪を強調するあまり、ついには、もし人に罪がなかったら、キリストもこの世に来なかったであろうとさえ言うようになったのです。スコトゥスが適確に指摘しているように、この考え方は狭く、罪があまりにも重要なものと考えられすぎています。この考え方は今日なお行なわれているところがありますが、これはなおさなければならぬものです。

先にあがないの意味について述べる時に触れた危険がここにあります。すなわち、あがないが負債の支払いか復讐の神によって要求される罰であるかのように述べられてしまうことがあります。しかし受肉の目的は、ただ単に罪のつぐないだけではありません。これは決してイエス・キリストがあがない主ではないということの意味するわけでもありません。また、この世に溢れている罪の事実を否定するものでもないのです。確かにイエスの愛はあがなう力のあるものであり、この世の悪や罪や憎しみをあがなってくださる。しかし、イエスが救い主であると言う時、そこにはもっと大きな意味があります。キリストは全人類の模範であり、すべての人間が、そうなるように呼びかけられている最高の姿です。そしてイエス・キリストの存在そのものが、まさに神の創造の目的なのです。

宇宙の進化と歴史の方向

科学は宇宙の進化について語り、哲学は歴史の意味について問いかけます。信仰の目にとっては、進化と歴史とは、神学で創造という言葉を用いてもっと豊かに語られている現実にあたります。実際、創造とは単に過去のことを意味するだけのものではありません。創造主である神を信じるとは、今もわれわれを支え、導き、未来へと呼びかけている神が、われわれを造ったことを信じることです。それはすべてが神から出ており、いずれは神に帰

ることを信することです。したがって、ティヤール・ド・シャルダンのように、カトリックの司祭でもあり、しかも科学者でもある人が、科学的宇宙観と、キリスト者としての信仰を一つのものにしようと努力したのも、決して不思議ではないのです。彼は科学者として進化論者でありながらも、一方、神が愛によってこの世界を造ったことを信じ、神の愛によって人間の歴史は全体的なキリストを形造り、すべてのものにおいてすべてである神へ向かう道となるようにと方向づけられ、運命づけられていることを信じるキリスト者でもあったのです。

右に述べてきたヴィジョンは楽観的で希望に満ちているのですが、キリスト教がそもそもそういうものなのです。だがそれは悪の問題に目をふさぐことではありません。神の意図した世界は、今われわれが生きている、このような世界ではなかったでしょう。自由という神の贈り物を乱用するのは、たいてい、この悪のせいであると言えましょう。さらに聖書は全人類は罪においてつながっていると述べています。しかしこれは、もっと大切な信仰というもう一つの真実の影の部分にすぎません。歴史についての神の計画によれば、イエス・キリストの人間性に見られるような、善に向かう連帯もあるのです。しかしこれによって悪と罪という理解しがたい謎が分かるわけではありません。ただ忘れてはならないのは、キリスト教は「解きがたい謎を説明する」ための「理屈」ではないということです。キリスト教は悪の問題についていわゆる解決は与えないのですが、たとえわれわれがそれを理解しないにせよ、その解決は神にあるという確信と安心感を与えてくださいます。われわれの「人間の賢さ」でその謎を解くことはできません。現に存在する悪や罪はわれわれを苦しめます。しかし人間のあらゆる苦しみを体験し、ついには死んでまでも、人間のいのちを引き受けて十字架についたイエスを仰ぐ時、悪の問題について、理論的にどう解決してよいか分からないながらも、十字架につけられたキリストの前に頭を下げざるをえないのです。

われわれに希望を与え、キリスト教的楽観主義の根拠となるのは、まさに死と復活というこのキリストの奥義です。われわれと同じように、人間の世界において示されたキリストの愛に満ちた生涯は、悪や罪に対する一つの勝利です。真の神であり、真の人

であり、われわれを代表するキリストとわれわれが一つになる時、われわれもまた、キリストの歩んだ道と似た道を歩み始めるための恩恵を受け取るのです。

悪の問題に対するもっと具体的な答えが示されています。それはキリストです。イエスは、「罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われた」（ヘブル四・一五）のであり、いつも愛の心が求めるところに忠実であったのです。しかもこれを特別に恵まれた環境で行なったのではなく、悪のはびこるわれわれ人間の世界にはいり、悪のために苦しみながら、誠実さをもってこれに打ち勝とうとしました。

イエスは人々のエゴイズムと憎しみの犠牲者であり、ついには死にまで追いやられました。イエスの兄弟姉妹である人間が、そのようにエゴイズムの心をもっていることを認めるのイエスにとってつらいことであったにちがいないのですが、イエスは人間に対し、愛がいかに大切なものであるかを身をもって示しました。イエスは父なる神に向かって祈ります。「もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」。しかし、イエスは父なる神の意志にみずからをゆだねて言います。「わたしの思いのままにではなく、みこころのままに」（マタイ 26・39、マルコ 14・36、ルカ 22・42）。

十字架につけられたイエスは、神から見離されたように感じて「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マタイ 二二七・四六）と叫んだといわれています。このようなことを考える時、明らかに悪が愛を打ち負かしているような印象をわれわれは抱いてしまいます。イエスの死の時の光景を思い浮かべる時、われわれの信仰は動揺します。パウロが「もしキリストがよみがえらなかつたとしたら、あなたがたの信仰もまたむなしい」（1 I コリント一五・一四）と言ったのももっともです。しかしキリストは復活しました。この信仰の光でイエスの生と死だけではなく、人類の歴史全体が照らされます。イエスがよみがえったと信じるので、われわれ自身が、われわれの愛するものが、われわれがそのまことをつくす対象が、イエスに続いてよみがえると信じるので、（パウロが言うように、どのようによみがえる

かは問題ではないのですが) 人間の生や歴史は確かに意味があるものととらえられます。

十字架につけられたにもかかわらず、イエスの生に意味があったようにです。ただしこのことは、「なぜ」人間は悪や不正や憎しみにとらえられるかが頭で分かるということではないのです。

われわれは悪の問題を理論的に解決することはできません。しかしそれにもかかわらず、最終的には愛が罪や悪や死に打ち勝つものであることを信じています。

悪に対する愛の勝利を期待する時、キリスト者は「どうでもいい」という態度をとるべきではないでしょう。また、この世に対して厭世的な態度をとるのはキリスト者らしくありません。また一方で、天国を待ち望むという口実でこの世に対する責任から逃げるのもキリスト者のとるべき態度ではないのです。それは逃避であり阿片です。

イエスとともに、イエスによって、自分が今生かされていることを心から信じる時、われわれは愛することができ、われわれの愛は敗北と見える死があるにせよ、最終的には完成に到りうることを知ることができます。

結論的に言えば、この愛を具体的に行なうようつとめることです。もしわれわれの努力が無駄ではないと信じるなら(1 I コリント 15・18)、分裂と戦いと憎しみのあるところに、たとえごく僅かでも、もっと統一と平和と愛があるようにと協力し、この世において、今ここに神の国を築きあげるために努力しなければならないでしょう。

神がわれわれの父であると本当に信じるなら、真の兄弟姉妹の世界を造りあげる仕事に自分のもてる力をすべて捧げるべきでしょう。

キリスト者が今日の社会問題にまじめに取り組もうとせず、この世の建設に具体的にたずさわるのを怠るなら、その信仰告白は空虚な言葉だけに終わってしまいます。先に述べた世界観、歴史観は抽象論で終わるものではありません。全体的なキリストや、キリストのからだについて述べたことは、われわれの日常の生において実現されなければならないものです。キリスト者に求められるのは、だれもがキリストのからだの肢体となれるよう、そし

てそれによって人間の歴史をそのおもむくべき方向に向かわせるよう全力をあげて取り組むことでしょう。このためにキリスト教は、その理想主義的観点（これも大切ですが）を少しも失うことなく、しかも聖書の精神を実践するにあたっては、現実にしつかりと足を踏まえることが必要となるでしょう。

キリスト教辞典

秘跡

目に見える形、表現となってあらわれるもの

たとえば、結婚式のとくに新郎・新婦の「はい」という言葉と「指輪をはめる」という身振りと行動を通して互いの誠実な約束の大切なことがあらわれる。体を通して心があらわれる。目に見える形を通して目に見えない心があらわれる。指輪が値段の高いかどうか問題ではなく、その徴をおしてあらわれる心の重要な意味と価値が大切です。

目にみえないキリストとのあいだがらがあらわされる。

三度額に水をかけるという目に見える身振りと行動をとおして、または、「父と子と聖霊の真のいのちのなかへあなたがしずみこまされるように」ということばを通してその人とキリストとの目に見えない深いつながりがあらわされる。

事実上の結婚と正式な結婚に例える。イエスキリストを神の子、キリストと信じていれば洗礼をまだうけていなくてもキリスト信者といえる。

教会の心と体、信徒のつながり

信徒の宗教団体（組織）